

Tetsunosuke Ichimura

市村鉄之助

Illustration 218

異世界魔王の
サテセサ
後継者²

試し読み版



THE ANOTHER WORLD DEMON KING'S SUCCESSOR

STORY BY TETSUNOSUKE ICHIMURA & ILLUSTRATION BY NI-YA

† CONTENTS †

プロローグ
006

✦第一章✦ 吸血鬼来訪
011

✦第二章✦ 再会
055

✦第三章✦ リオネの想い
108

✦第四章✦ 想定外の敵
146

✦第五章✦ アンナ・エルミート
226

エピローグ
302

✦書き下ろし✦ 初体験ぞり直し
304

あとがき
320

プロローグ

「ご苦労さまでした、叶海麻人様」

姉のように慕った少女の聲が、兄と慕った少年を裏切った。

視界いっぱい埋め尽くされた魔力の炎が、大切な人を焼いていく。

なぜ、こんなことになってしまったのだろうか、と思わずにはいられなかった。つい、さっきまでお互いのことを守り、いた勞わりあっていた二人が、なぜ――。

姉の裏切りを止めることができず、兄を救うこともできないことが、情けなくて腹立たしい。

手も足も動かすことができず、声を発することさえ封じられた哀れで幼い少年は、信じてもない神に助けを求め祈る。

しかし、少年の祈りが届くことはなかった。

「――アニキッ！」

岩陰で体を休めていたトラスト・ランディは、自らの叫びで目を覚ました。

少し休憩するはずだったが、溜まった疲労のせいで気づけば眠っていたようだった。

嫌な夢を見たせいも、心臓の鼓動が早く、汗をかいている。額に張りつく青い髪を汗ごと手で拭い、悪夢を振り払うように、トラストは立ち上がる。帝国領土を力なく歩きだした。

鞘をなくした拔身の剣を杖代わりしながら、土で汚れ、傷ついた体を引きずりながらただ前に向かって歩き続ける。

アンナ・エルミートによって兄と慕い続ける叶海麻人と引き離され、抵抗することもできず軟禁された。

ひどい扱いをされたことは一度もなかったが、トラストは麻人に会いたかった。

安否を確かめ、自分は裏切っていないと声をだして伝えたい。

あのとき、麻人がアンナに裏切られた瞬間に居あわせながら、声ひとつ発することもできなかった不甲斐

ない自分を思いだすたびに悔しさがこみ上げてくる。きつと自分も同じように裏切ったのだと勘違いされているのだろう。だけど、そんなのは嫌だ。

誤解されたままでは嫌だ、という一心でトラストは前進し続ける。

体力はすでに限界だった。

軟禁から抜け出すことができたのはよかったが、頼ろうとしていたシャナリヤ・ウエルカーは行方知れず、追手をかわしながらたどり着いたエルフの集落は無残に焼かれ、遺体が放置されていた。

中には見知った顔や、言葉を交わしたことがあるエルフもいて、あまりにも惨状に嘔吐を繰り返したことは未だ忘れることができない。

トラストにできたことは、遺体を放置することができず、埋葬したことだけ。

なぜエルフの集落が焼かれなければならなかったのかもわからないまま、トラストはただサンディアル王国から離れようと自然と帝国へ向かった。

それから数日歩き続けた。かつては麻人たちと歩い

た道をたつたひとりでの進み、ときに追手から隠れることも、戦うこともあった。

帝国領土へ入ると、魔物の数が増えて戦いが増した。しかし、相手が人間ではないので少しだけ気が楽だった。

だが、魔物はサンディアル王国兵と違って容赦なく殺そうとする。殺し、食らうつもりで襲いかかってくる。

死に物狂いで抵抗した。どれだけ今まで仲間のお荷物であったのか痛感しながら戦い続けた。

正直、生きてるのが不思議なくらい死にかけた。そのたびに、負けてたまるか、と歯を食いしばって剣を振るった。

魔物の命を奪うことで自分が生きているのだと実感できた。迫りくる危機から脱した瞬間だけ、生を噛みしめることができた。

何日もともに眠っていない。先ほどのようにうたた寝ができればマシなほうだ。食事だつてわずかに持っていた金で干し肉をポケットに入る程度しか買えな

かった。あつという間に食料が尽きれば、殺した魔物の肉を食らった。

まるで自分が魔物になったような錯覚に陥りながら、ただ仲間に会いたいという気持ち心が人間のままでいさせてくれた。

少しでも気を張り詰めていないと意識が遠のいてしまいそうな疲労の中、鉛のように重い足を引きずりながらアンナのことを考える。

笑顔を絶やさず、誰にも優しい聖女の名にふさわしい人。

孤児で盗みを働いていた自分が麻人に捕まったとき、しかるべき場所へ突きだしてしまえばおしまいだったはずなのに助けてくれた恩人。

王族だとあとから知って大きく驚かされたが、それでも出会ったときから態度を変えることなく優しくあり続けたアンナ・エルミート。

一年以上続けた旅を思い返せば思い返すほど、なぜアンナが麻人を裏切ったのかわからなくなる。

麻人を犠牲にしなければいけないほど魔王は倒さな

ければならなかったのか、自分には理解しようがない事情があつたのかもしれない。だが、それなら話してほしかった。話してさえくれれば、大切な兄を犠牲にしようとする姉の行動を止められたかもしれない、と何度目になるかわからない悔しさを覚える。

しかし、もうそれも終わりがもしれない。

「はははっ……ちつくしゅう……」

眼前には狼の群れが広がっている。ただの狼ではない。魔力によつて突然変異した狼たちだ。

魔物に分類されてはいないが、人間にとつて十分すぎるほど脅威である。

万全な状態で数体ならトラストでも乗りきれたかもしれない。だが、満身創痍の現状では無理だ。

まだ幼さが残る体から悲鳴があがり、動くことが苦痛でしかない。杖代わりにしている剣を持ち上げる気力も、構えて振るう力もなにも残っていなかった。

死にたくない、と思つた。だが、それ以上に麻人たちに会いたかつた。

死は恐ろしいはずなのに、恐怖はない。胸の内にあ

るのは、ただ家族のようだった仲間を思う気持ちだけ。狼たちが低い唸り声をあげる。トラストを獲物と定め、牙をむきだしにして威嚇し続ける。

抵抗する力が残っていないトラストだったが、最後まであがこうと決めた。

狼たちがいつせいに駆けたそのときだった。

トラストと狼の間にひとりの少女が音もなく現れた。

「——え？」

いつ、どのタイミングで少女が現れたのかまったく気がつくことができなかつたトラストは、危機的状况にもかかわらずに間の抜けた声をあげてしまった。

狼たちも突然の乱入者に警戒したのか足を止めている。

少女はトラストとあまり歳が変わらないように見えた。少女のほうが少しだけ年上かもしれない。伸ばされた黒髪は櫛を通していいのかボサボサで、美少女といっても過言ではないかわいらしい容姿が台なしになっている。

スカート姿の上から汚れた白衣を羽織った少女はト

ラストに視線を向けてわずかに微笑むと、狼に向かつて人差し指を突きだした。

威嚇する狼に向けた指先から魔法陣が幾重にも展開されていく。

魔術に詳しくないトラストだったが、少女から立ち昇る魔力に思わず息を呑む。

はつきりと視認できるまで高まった魔力が魔法陣を介して指先に集まっていく。

「ばーん」

まったくやる気を感じさせない鈴を転がすような声が響くと同時に、指先から放たれた魔力が赤い閃光となり、狼の群れの真ん中に放たれた。

刹那——、轟音が鳴り響き、鼓膜が痛いほど揺れる。

熱波が襲いかかり体が焼かれそうになる。

爆風に体が吹き飛ばされそうになるのを地面に剣を突き立てて必死に耐えた。

土砂が宙を舞い、雨のように降りそそいできたので、思わず目を閉じてやり過ごす。

しばらく経ち、熱も衝撃も降ってくる土もすべてが

落ち着きを取り戻していくと、恐る恐る目を開けたトラストの眼前には、

「嘘、だろ？」

巨大なクレーターが作られていた。

周囲にはわずかに残った狼たちの一部が申し訳ない程度に落ちてはいるだけ。

草木も、岩も、すべてが少女の放った魔術によって薙ぎ払われ、地形すら変えてしまったのだと受け入れることに時間が必要だった。

「やりすぎちゃった……音が聞こえてたら姉上に怒られる。でも、その前にお風呂入りたいかも」

トラストが食らえば塵ちりひとつ残らないであろう強力な魔術を放っておきながら、特別なにかを気にした様子を見せない少女に警戒心さえ抱くのが馬鹿らしくなる。

きつと不意打ちを狙って剣を振り降ろしたとしても今のトラストでは少女を倒せない。倒せなければ、怒りを買って先ほどの魔術を放たれるだけだ。

おそらく死んだこともわからないほど簡単に殺され

てしまうはずだ。

「やってらんね……」

自分がどれだけ苦労してここまでできたと思ってるんだ、とトラストは自分勝手だと承知で不貞腐れる。

何度も死にかけ、死を覚悟し、抗おうとしたというのにひとりの少女が簡単に状況を覆した。

もしも彼女が命を狙ってきたとしても、抗うのも無駄だと本能が抵抗を放棄してしまった。

好きにしてくれといわんばかりに食いしばっていた顎から力を抜いて、強張っていた体を弛緩させる。

重力に従うまま地面に倒れると、嫌味なくらい真っ青な空が見える。

「おーい。だいじょうぶ？」

少女が近づき声をかけてくれる。

声に敵意はなく、土を被った髪と茶色く染まった白衣がどこか間抜けで笑みがこぼれた。

「どうして笑ってるのかな？」

興味を抱いたように見下ろす少女を視界に入れたまま、トラストは静かに意識を手放すのだった。

第一章 吸血鬼来訪

魔王リオネ・シュタインは執務部屋の窓を開けて、冷たい風を感じて大きく深呼吸する。午前中の書類仕事を終えた彼女は体を大きく伸ばして、こった肩や腰をほぐしていく。長い日など一日中椅子にしばらくつけられてしまう日もあるが、やはり本質は魔術師であるため体は適度に動かしたいと思っていた。

日差しこそ暖かいが冷たい風が本格的な冬が近くまできていることを感じさせる。

帝国は大陸北部に位置するため、冬になれば雪が積もり街から街への移動も困難になってしまう。外部の敵から身を守るのに最適なのもかもしれないが、食料の備蓄、避難民を迎えるにあたっても雪のせいで困難になるため問題は多い。

帝国領土すべてに雪が降るわけではないので、作物は育つし、狩猟もできるのだが、春夏に比べれば物資は不足する。それでなくても今までの戦争のせいで決

して帝国は豊かではないのだ。

帝国は、作物も育つし、家畜も多い。山や川も多いので自然の実りをもちょうこともできる。しかし、人材が足りていない。人間と違い、魔族の中には狩りに向かない種族もいるのだ。

「やることはたくさんあるね」

同盟国と貿易があり、魔族は基本的に助けあうのが民が飢えることも、生活に困ることもない。それでも冬になれば民の生活を考え、行動しなければならぬのだ。

幸い、支えてくれる仲間がいるので不安はない。今までやってこれたのだから油断しなければいいとわかってはいるが、毎年冬を乗りきるまでが大変なのだ。なによりも、リオネは寒いのが嫌いなので冬は好きじゃない。

魔族の中には冬眠してしまう種族だっている。

今、手がけている書類も冬に備えてのものだ。つい先日、保護した避難民たちにも冬の準備をさせなければいけない。やるべきことはたくさんあるが、すべて

が魔王の仕事ではない。帝国軍や各種族の長が魔王の指示を受けて各々の領地を守るのだ。リオネは国全体を見なければいけないが、指揮するのは帝都が主となる。

書類をめくっていると、庭から楽しそうな声が聞こえる。同居人たちが洗濯物を干しているのだろう。ここ数日ですっかり慣れてしまった。

いいことだ、とリオネは思う。

ここところ、エルシュノン王国と戦い、勇者叶海麻人と一騎打ちの果てに九死に一生を経て、冒険者と戦い、さらに墮天使と死闘を繰り広げた。

だから、穏やかな日々が続くことはありがたい。

椅子に再び座り、冷たくなった紅茶を飲むリオネはとても機嫌がよかった。

それもそのはず、母の死後疎遠とまではいかないが決してよい関係と言えなかった父親イグナシオ・シュタイン前魔王と関係が修復したのだ。お互いに歩み寄ることができてから三日が経ったが、執務を終えるとリオネは甲斐甲斐しく父のもとへ足を運び、ときには

食事を一緒に取ることもあった。

早くに母を亡くし、家族がバラバラだったせいもあって家族愛に飢えていたリオネ。魔王として帝国の民を家族として愛していたが、それ以上に本家の家族からの愛情も必要だった。

そんなリオネと父親の仲を修復させたのは地球からこちらの世界イシュタリアへ召喚された叶海麻人だ。

亡き母前原梨香子が自分たちのために残してくれた手紙があつたのだが、地球人である母の文字はイシュタリア人であるリオネやイグナシオにはどう頑張つても読むことができなかった。諦めてしまつたりオネと、諦めることができずに長い時間を費やすも成果を得られなかったイグナシオだったが、同じ地球の日本を出身とする麻人のおかげで手紙の内容を知ることができた。

父は憑き物が落ちたように穏やかに、そして彼の中止まっていた時間が動き出した。リオネは、母のことしか考えていなかった父を呆けていると勘違いしていたが、誤解だと知り、和解できた。

リオネもまた停滞していた時間が動き出したのだ。

今までの時間を取り戻そうとリオネとイグナシオは時間を作って会い、話をした。惜しむならそこへ妹が参加してくれなかったことだ。それだけが残念だった。今日も夕方に麻人とともに父の屋敷を訪れて母の残した手紙を読んでもらうことになっている。だが、きつと妹はこないとわかっていた。

妹のことを考えると、気が沈んでしまう。

「おや？」

執務机の上にある手紙の束の中に、見知った名前を見つけた。

ヘルティ・シュタイン。つい今まで考えていた妹の名前だ。

「あの子が私に手紙をくれるなんて珍しいね……なにかあったのかな？」

記憶を掘り起こしてみても、妹から手紙をもらったことなどまだ母が生きていたころ遊びとしてやり取りをしたくらいだ。

魔術研究を行っているヘルティはあまり自分の屋

敷からでてこようとはしない。とくに、母が亡くなつてからは放っておけば食事や睡眠さえ疎かにしてしまふほどだ。年ごろの少女でありながら、女であることを放棄しただらしなさは姉として頭が痛くなる悩みのひとつであり、一週間に一度はメイドとして有能なクラリッサ・ルルクセンを派遣しなければ心配で気がでないほどだ。

魔術の実験と称してときどき外出しているようなのだが、基本的に妹は単独行動ばかりなのでリオネもクラリッサもその場を見たことがなかった。

もしかすると避けられているのではないかと不安になるも、誰に対しても同じなようで胸を撫でおろしたことは記憶に新しい。

先日も、母の手紙の内容を伝えたいと思つたりリオネが使いをだすも、「やることがあるから」と父の屋敷にこようとはしなかった。リオネの記憶ではヘルティは自分と同じ以上に母を慕っていたのを鮮明に覚えている。

確かに母が生きていたのはずいぶん前ではあるが、

妹の中で母の思い出が風化しているのなら寂しいことだ。

関係がうまくいっていない妹から送られてきた手紙に興味を湧く。いったいどのような内容なのだとはやる気持ちを抑えて手紙の封を切る。

「——は？」

そして、リオネは目を疑った。

『わたし結婚します』

手紙の内容は簡潔な一言だけ。しかし、内容が信じられない。いや、受け入れがたいと言うべきなのかもしれない。

驚愕と絶望で足が震えるのを抑えられず、気を抜けば床に崩れ落ちてしまいそうだった。

気丈にもリオネは負けるものかと歯を食いしばり、視界を滲ませていた涙を拭う。そして、大きく息を吸うと、

「先を越されたあああああああつ！」

悔しさを込めて絶叫した。

*

叶海麻人はクラリッサ・ルルクセンと叶海ルリと一緒に、魔王リオネの屋敷の中庭で洗濯をしていた。

かわいらしいフリルのついた洋服を着せられて、歳相応のかわいらしさを取り戻したルリは楽しそうに洗濯物を広げて走り回っている。クラリッサは最初こそ叱ろうとしたが、ルリの笑顔を見ると苦笑して見守ることにしている。

ルリと暮らすようになって、もう三日が経っていた。麻人はルリと実の兄妹のように仲よくなり、大切に思っている。一緒に食事を取り、時間が許す限り今日のようにこうして色々なことをして過ごしている。夜になればひとつのベッドで眠り、初日こそルリと二人だったが、次の日からクラリッサとここにはいないエリザヴェータ・ロヴナーの四人で並んで眠りもした。誰かと一緒に眠らないと安心できないように、魔さ

れてしまうことを病院から聞かされていたので心配していたが、この三日間でルリが魔されたことはなかった。

自分と一緒に眠ることで安心感を覚えていくのならそれでいい。ただ、夜に肉関係を持つことができず欲求を持て余したエリザヴェータが肉食の目で見つらえていることが少しだけ怖い。そろそろ襲われてしまうのではないかと思っている。

エリザヴェータもルリを妹としてかわいがっているため、目の前で行為に及ぶことはないと信じているが、よくも悪くも欲望に素直なので少しだけ不安だった。

そんなエリザヴェータはストレス発散のためか、狩猟本能を満たすためかわからないが、近くの森に夜が明ける前にでかけてしまった。

突然起きたと思えば、クラリッサを叩き起こし、弁当を作らせて嬉しそうにしていたことを思い出す。

睡眠を邪魔されたクラリッサだが、美容がどうこうと不機嫌に文句を言いながらもしつかりお弁当を作りエリザヴェータを見送るあたりは彼女の元来の優しさ

が感じ取れる。

お弁当はおにぎりと漬物という、日本人である麻人にとつて懐かしく感じるものだった。さすがは初代魔王草薙健流だ。しつかり日本人の魂ともいえるおにぎりを帝国に根づかせていた。

ついクラリッサにお願ひして、朝食をおにぎりにしてもらってしまった。クラリッサにだけ用意させるのは悪かったし、作ってみたかったので麻人も手伝った。朝食の席でリオネやドルノワ・バルトも平然とおにぎりを食べていたことに少しだけ違和感を覚えて苦笑してしまった。

しかし、ルリだけは握られた米をしげしげと眺め、どう食べていいのか不思議そうにしていたのが印象的だった。麻人が食べ方を教えると、満面の笑みでぺろりと平らげて「美味しい！」と言ってくれたことは嬉しかった。

「おにいちやん！」

ルリが洗濯物を干し終えると、褒めると言わんばかりに大きく手を振ってくる。麻人も笑みを浮かべて手

を振り返す。

「麻人さま、お手伝いして下さってどうもありがとうございます」

「気にしないで、これもいい魔力の勉強になるよ」

申し訳なさそうな表情を浮かべているクラリッサに気にしてないと思える。クラリッサとルリが洗濯物を干すのに対して、麻人は洗う係なのだ。

洗濯といっても手洗いではない。さすがに女性たちの下着があるのだから、やれと言われても困ってしまう。麻人は桶に張られた水の中に洗濯物と一緒に腕を突っ込んでいるだけ。もちろん、それだけでは洗濯にならない。そこで魔力が必要となる。桶の中に一定の魔力を流すと、仕組みは不明だが地球では定番の洗濯機と同じように水が回転するのだ。

リオネの妹が日本人の母親前原梨香子の話を聞いて考案した『魔力式自動洗濯機』というのがこの桶の名前だ。

魔力を流していると水が勝手に左右に回転して洗濯をしてくれるのだ。そこに洗剤を投入すれば泡立ち、

しばらく回し続けると、綺麗な水に交換してすすぐ。まさに洗濯機だ。

しかし大きな欠点もある。それは、リオネやクラリッサ、エリザヴェータの下着が腕に絡みつくことだ。洗っている最中とはいえ、使用済みの女性の下着に触れるとなんだかいけないことをしている気分になってしまう。

そばにいるクラリッサはとくに気にした様子もなく、リオネもエリザヴェータも洗濯をしていることに礼を言ってくれるのだが、麻人はモヤモヤした言葉にできない気まずさを覚えていた。

下着のみに興奮を覚える特殊な性癖はなかったはずなのだが、目の前に腕に絡みつく下着を身につけた女性がいると思うとゾクゾクした興奮のような感じが胸の内ですぶっているのを自覚してしまう。

「どうかしましたか、麻人さま？」

「な、なんでもない。別に俺はなんにも変なこととは思っていないから大丈夫！」

「……ええと、本当にどうもしていませんか？」

「全然問題ないよ！」

クラリッサと共有している魔力を介して邪な感情よこしまがバれてしまったのではないかと慌てるも、彼女は不思議そうにしているが気づいた様子はなかった——と、信じたい。

特殊な性癖を持っていると勘違いされて嫌われるのだけはごめんだ。

誤魔化すように大げさに声をあげて笑う。だが、無理があつたので話題を投入することに作戦を変える。

「と、ところでさ、この魔方式自動洗濯機だっけ？ 作つたのはリオネの妹だつて聞いたんだけど？」

「ヘルティーさまですね」

「そうそう。そのヘルティーって子とは一度も会つたことがないんだけど、どんな子なの？」

同じ日本出身の前原梨香子の血を引くのなら、リオネ同様にもう一年以上目にしていない日本人の面影があるのかもしれない。

会つて話をしてみたいと思つていたのだが、イグナシオ・シユタインとリオネのために前原梨香子の手紙

を読み伝える場にヘルティーは一度も顔をださないうめ、機会に恵まれなかった。

残念だと思ふ以前に、母親の手紙の内容を知りたくないのかと疑問に思えてならない。

「ヘルティーさまですか……そうですな、一言で表せば『魔術馬鹿』ですな」

「へ？」

「あと『引きこもり』ですし、『生活能力皆無』でもあります」

「いや、ちよつと待つて」

「どうかしましたか？」

「どうかしましたかつて、言われても……」

麻人はヘルティー・シユタインがどのような人物なのか聞きたかっただけなのだが、クラリッサのヘルティーに対する言葉に驚いてしまう。

仮にも魔王つきメイドが魔王の妹を散々な言い草だ。だが、クラリッサの言葉に悪意は感じず、親しい人物に対するゆえの辛辣しんちゅうさに思えた。

麻人の戸惑いを察したようにクラリッサは苦笑する。

「言いすぎと思えますか？でも本当なんですよ。あの子は昔からひとつのことにのめり込むとそればかりで他を疎かにしてしまうのです」

「やっぱり昔からの知りあいなんだ？」

もちろんです、とクラリッサが頷く。

「魔王さまの妹ですので、自然と妹のようにかわいがつてきました。ドルノワだつて同じですよ」

「へえ、みんな昔からの付きあいなんだな」

先日ドルノワが幼少期にクラリッサよつて育てられたことを教えてくれたのを思い出す。以前、リオネの言つた通り、帝国はひとつの家族なのだ。少なくともリオネの周囲は家族として成り立っていると思えた。

現にクラリッサもリオネたちを家族だと思つていることがよくわかる。ドルノワだつて同じだ。

願わくは、その家族に自分とルリも加えてもらいたい。

「だからでしょうか、顔をあわせればつい小言ばかり言つてしまいます。ヘルティーさまは少々変わった子ですが、魔術研究が趣味であり魔術開発も行う優れた

魔術師なのです。魔王さまの魔術も、大半がヘルティーさまのオリジナルなのですよ」

「……さすが魔王の妹、と言うべきなのかな？」

「言つてあげてください。きつと喜びます」

リオネの使う魔術はどれも強力なものばかりだった。魔力量が多く、魔力そのものが強くなければ十全に扱えないものだと言ったことがあつた。

エルフである師匠のシヤナリヤが使う魔術とは別の、人間が使う魔術とは威力もなにもかも違うリオネの魔術の正体が、まさか彼女の妹が開発したオリジナルだとは思つていなかった。

「好きなことを頑張るのは構わないですし、応援したいのですけど、いくらなんでも食事を抜いて倒れるまで没頭するなんてメイドとして許せません」

ただし、クラリッサから話を聞く限りでは、魔術研究と開発には優れているが、それ以外は駄目らしい。

「魔力式自動洗濯機も梨香子さまから地球で日常に使われていた、『機械』というものを聞いて作ったそうなのですが、確かに洗いとすすぎはしてくださる

のですが、正直全部が自動ではないですよね」

「確かに。しぼるのは手動でやらないと駄目だからね」

「量が多ければ助かるのですが、少ないなら手洗いを
してしまったほうが早かったりします」

そんな会話を続けながらクラリツサと一緒に洗濯物
の水をきっていく。彼女の言う通り、名前こそ全自動
だが、本当に全自動なわけではないのだ。

とはいえ麻人的には助かっている。洗濯物を干した
ことがあっても、手洗いなどはしたことがない。豊か
で便利な時代に生まれた麻人にとって、一昔前の洗濯
のように手洗いをする機会はあるはずもなく、必要が
あつても母親がしてくれていた。

洗濯の大変さをこの数日で学んだおかげで、改めて
母親の偉大さがわかった。朝、洗濯をして、朝食の支
度をしながらお弁当まで作ってくれていたことに感謝
しきれない。親孝行できていないことが悔やまれてな
らなかつた。いつかどこかで感謝の気持ちを伝える機
会があればいいのだが、おそらくないだろう。そのこ
とが少しだけ寂しい。

洗濯物をカゴに移し、物干し竿に干していく。クラ
リツサは自分の下着をいち早く確保して自ら干してい
た。

庭を走り回っていたルリも新たな洗濯物の到着に飛
んできた。

「ほすぞー！」

「ルリさま、あまりはしゃいで転んだりしないでくだ
さいね」

「はい！」

ルリが楽しそうにシーツを広げて物干し竿に広げて
いく。身長が低いため、麻人が背後から手伝いながら
だが、一緒になにかができることが嬉しいのだろう。
ルリの笑顔が途切れたのをこの三日間で一度も見たこ
とがない。

できることならいつまでも笑顔でいてほしい。

そんなことを思っていたとき——屋敷の中からルオ
ネの悲鳴のような叫び声が聞こえた。

思わず三人は顔を見あわせてしまう。

「今のリオネだよな？」

「ええ、とても残念なことに魔王さまの声でしたね」
手を止めた麻人の問いに、クラリツサが嘆息して答えた。

「ねえねえ、さきをこされたってどういう意味なの？」

「どういう意味なんだろうねえ……」

同じく動きを止めていたルリが麻人に尋ねてくるが、正直こちらが知りたかった。予想がまったくできないわけではないのだが、かなりデリケートな問題かもしれないので適当なことは言えない。

間違はなく屋敷から聞こえてきた悲鳴のような叫び声はリオネのものだった。本来ならなにが起きたのか確かめるために駆けつけなければならぬ。しかし、叫び声が「先を越された」というものだから、行動よりも先に疑問が浮かんでしまったのだ。

「あのさ、クラリツサ。俺の中でももしかしたらつて答えが浮かんでるんだけど当たってほしくない」

「奇遇ですね。わたくしでもす」

はあ、と揃って重々しい息を吐きだした。

「……おそらく、ご友人かお知りあいからの結婚報告

が届いたのでしよう。年齢イコール恋人いない歴の魔王さまは自身が行き遅れであることをもの凄く気にしていますから」

呆れた表情を隠そうとしないクラリツサに麻人は笑うしかない。

「いきおくれ？」

「若くてかわいいルリさまは気にしなくてもいいことですよ」

「はーい！」

「いい子です。あとでフルーツを食べさせてあげますね。では洗濯の続きをしましょう」

「やったー！ つづき、つづきー」

ルリが『行き遅れ』の意味を不思議がるが、クラリツサが笑顔でうまく誘導して興味を逸らすことに成功する。麻人は安堵した。帝国を治める魔王が行き遅れを気にしているのだと幼いルリに説明できるはずがない。

麻人も二人に倣って手を再び動かし始めたが、

「おいおい、リオネを放っておいていいの？」

叫び声こそ今は聞こえないが、すすり泣くような声とずるずるなにかを引きずる音が近づいてくるのが正直怖い。

「触らぬ神に祟りなしですよ、麻人さま」

「いや、リオネは魔王だけどね」

長い付きあいのクラリッサが放っておいていいのだと判断したのなら平気か、と麻人もリオネの放置を決めて洗濯物を次々干していく。

三人がかりで動いたおかげであつという間に洗濯物を干し終えることができた。ルリはすでにフルーツが食べたくて「フルーツ、フルーツ！」と歌っている。

だが、麻人たちは屋敷に戻りたくなかった。

なぜなら——屋敷の中から黒い瘴気のようなものを放ちながらこちらを窺っているリオネがいるからだ。

いっそ声をかけてくれればなにかしらの対応ができるのかもしれないが、ただ見つめられているだけなのでどうするべきか、と脳裏に浮かんた数ある選択肢から最良のひとつが選べない。

「はつきり言いましょう。邪魔だ、と」

「ごめん。俺にはそんな勇気がないよ……っていうか、リオネも結婚を気にしたりするんだな。ちよつとだけ驚いた」

「魔族としては十分に若いのですが、リオネさまは長年魔王として自分自身のこととまわしにしていたから。感謝していますし、お手伝いできていることは誇りに思っています。ですが、一度ああなつてしまうと実に鬱陶しいと本気で思います」

付きあいが長いだけあつてクラリッサの言葉には遠慮がない。

「でも、さすがにかわいそうだから声をかけてあげようよ。ほら、ルリ。あそこにいるお姉ちゃんも一緒に誘ってお茶にしよう」

「うん！」

打てば響くように返事をしたルリがリオネに向かって駆けていく。ルリと言葉を交わすとリオネが手をつないでこちらにやってきた。心なしか足取りが重そうに見える。

「……やあ、麻人。クラリッサ。洗濯物を干してくれ

てありがとう。私の心は洗濯物と違って真つ黒だよ」

「なに言ってるんだ？」

「世の中の理不尽を味わたったのさ。神なんてものは信じていないけど、もしも神がいるならきつと私のことが大嫌いなはずだよ」

虚ろな目をしておかしなことを言いだすリオネに麻人は冷や汗を流した。

「駄目です、重症です。かつてないほど壊れていますね。さて、どうしましょう」

「放っておきたい俺がいる」

関わりたくないと思ってしまった麻人が素直に本音を吐露する。クラリツサも同感なのか苦笑いを浮かべて頷いている。すると、リオネがゆっくりと懐から一枚の手紙を取りだす。

「なにこれ、手紙？ いや、俺に渡されてもこつちの世界の文字は読めないんだけど……」

「ではわたくしが……あら、差出人はヘルティーさまなのですね」

「その名前って、リオネの妹だよな？」

「ええ、そうなのですが、ヘルティーさまが手紙とは珍しいですね。内容を拝見してもよろしいですか、リオネさま？」

ルリに服を引つ張られながら「だいじょうぶ？」と声をかけられているリオネが弱々しく頷くのを確認すると、クラリツサは手紙を開く。

「——え？」

そして、まるで信じられないものを見たかのように、驚愕の表情を浮かべた。

「え？ なに、どうしたの？ そんな思いきり目を見開いて体を震わせるほど酷いことが書いてあったの？」

「そうだともし！」

突如、くわつと目を見開いてリオネが大声をあげる。「姉にこんな仕打ちができる子だったなんて思ってもいなかったよ！ 私の心はガラス細工のように砕けてしまった！」

「その割には元氣そうだな。ついさつきまで落ち込んでいたくせに、どうしたんだよ急に……っっていうか、

説明してくれ。俺には手紙の内容がわからないんだから」

いい加減に説明のひとつくらいしてもらいたいと心底思った。リオネは少し鬱陶しいし、クラリッサはなぜか硬直している。ルリは突如大きな声をあげたりリオネに驚きはしたが、元気になったと判断したのか嬉しそうににこにこしていた。

「ならば聞いてくれ麻人。私の妹、ヘルティ・シュタインが——結婚することになった」

「ん？」

「だから！ 私の妹が結婚することになったんだ！」

大声をあげるリオネに対し、

「いや、おめでたいことじゃないか。よかつたな、おめでどう」

祝福の言葉をかける麻人。しかし、リオネはそうでもないらしい。妹が結婚するんだから少しは喜んでやれよ、と突つ込みたくなる。

「めでたくななどないよ！ あの魔術馬鹿の引きこもりが結婚するんだぞ！ 相手は誰だい？ まさか異次元

から召喚した怪物じゃないだろうね？」

「酷いこと言うなよ、お前の妹はそんなのと平気で結婚できるのか？」

「できる。あの子はいつも予想よりも斜めなことを平気でする子なんだ……」

どんな子だよ、と突つ込みたいが我慢する。もうこの話はどうでもよくなってしまった。

「駄目だ、麻人はこの事態がちゃんとわかっていない。クラリッサ、シヨックなのはわかるがしつかりするんだ！」

「り、リオネさま……」

未だ驚愕に固まっていたクラリッサが恐る恐る声を絞るように呟く。

「大丈夫か、クラリッサ？」

「引きこもっていても出会いがあるのですね」

「いつも通りのクラリッサで安心したぞ！」

「ルリ、先に食堂にいこう」

「うん！」

リオネだけではなく、クラリッサについても放置す

ることこそ最善だと判断した麻人はルリの手を握つて離れようとする。

「待ってくれ、麻人！ 妹に先を越されて悲しんでいる女二人を残してどこへいく？」

「あのさ、悪いけど、正直に言うよ」

「構わない、言ってくれ」

「どうでもいい！」

「な、に……」

信じられないとばかりに大きく目を見開くりオネ。

「姉なら妹の結婚を祝つてやれよ。せっかく妹が幸せになるんだから、リオネがそんなだと悲しむかもしれないぞ」

「ぐう……正論を言うじゃないか。若い麻人には私たちの気持ちなどわからないようだね。だけどクラリッサならわかるだろ？」

「いえ、わかりません。麻人さまのおっしゃる通りです。ヘルティーさまの幸せを素直に喜びましょう」

「まさかの裏切りだ！ 今までショックを受けていたくせに、麻人の言葉を聞いてあっさり意見を変えたな。

そうか、所詮しよせんキミも愛する男ができた人生勝ち組だったね。妹だけではなく、姉妹のように育ったクラリッサにも突き放されていくなんて、女としての自信が木っ端微塵だよ」

「リオネさまは、女としての自信があつたのですね。知りませんでした」

悲しみにくれながら地面に膝をついたリオネに、麻人は面倒だと言わんばかりの視線を向ける。妹の結婚ひとつでここまで愉快な行動を取るとは思っていないが、普段は魔王として非の打ちどころがないリオネの違う一面が見られたことはよかつたと思う。こういうリオネが見られたのも、それだけ彼女が打ち解けてきた証拠だろう。

麻人は結婚というものに焦りはない。いつかはするのかもしれない。以前、ドルノフ・バルトと話したように地球に戻れないならこちらでの生活を真剣に考えなければいけないのだ。愛するクラリッサとエリザヴェート、そしてルリがいる。こちらの世界に永住することも覚悟している。

今回の一件で、少し先の未来まで考えて見るべきかもしれないと思った。まだ十代の麻人にとって結婚というのは未知なるものだ。子供ができて父親になる。守るべき家族ができる。自分に務まるのかと不安もある。

今だって妹のルリと一緒に過ごす日々が新鮮で、学ぶことの多い日々なのだ。大変だとは思わないが、ルリのために失敗したくないと思っっている。

だから、もう少し未来を考える猶予がほしいと思っ
てならない。

「どうかしたの、お兄ちゃん？」

「いや、なんでもないよ」

ルリからどこか心配するような感情を宿した瞳を向けられてしまった。

もしかすると魔力を介してクラリッサにも今考えていたことが伝わってしまったのではないかと不安になるが、幸いリオネに声をかけていたので気づいてないようだ。

「あ、麻人に頼みがある」

クラリッサの手を借りて立ち上がったリオネ。

「俺にできることなら別にいいけど」

「妹の様子を見にいきたんだが、幸せオーラ全開だったら私の心はきつと折れてしまう。強大な敵と立ち向かうためにも、キミについてきてほしい」

「知るかつ！」

「つ、つれないことを言わないでくれ、クラリッサはもちろんきてくれるだろ？」

「魔王さまのご命令とあらば——たとえ、どのようなくでもない命令であつたとしても従います」

「凄く嫌そうな顔をしてるぞ、クラリッサ……リオネ、無理強いはやめてやれよ」

「いつもは笑顔でついてきてくれるのに……」

心底嫌そうな顔をしているクラリッサにショックを隠せないリオネ。

おそらくヘルティーに会いたくないのではなく、この暴走しているリオネに付きあいたくないのだろう。気持ちにはよくわかる。

ただ、このままでは埒が明かない。

大げさにため息をついた麻人はクラリツサと視線をあわせる。彼女は口もとに手を当ててリオネに隠れて微笑んでいた。きつと、リオネの反応を楽しんでいるのだろう。

「わかったよ。一緒にいけばいいんだろ？」

「本当か！」

「本当だよ。正直言うと、ヘルティー・シュタインのことが少し気になっていたんだよ」

リオネとイグナシオが何度か誘っても一度も母の手紙の内容を知ろうとしなかったヘルティーがなにを思っているのか気になっていた。

特別ヘルティーが母親に悪感情を持っているわけではないのだということはわかっている。ならばなぜ、と疑問に思うのだ。

純粹にリオネの妹に会ってみたいという感情と、ヘルティーが母親に対してどのようなことを思っているのか知りたかった。

「それで、いつ妹に会うの？」

「今日だよ」

「早いなっ」

「こういうことは早ければ早いほうがいい。主に、私の精神的に」

「お前なあ、妹に会うだけでどうしてそんなことになるんだよ」

呆れを隠せない麻人だったが、リオネは至極真剣な面持ちだ。

「まだ若い麻人には私の気持ちにはわからないだね。クラリツサならわかるだろ？」

「いいえ、わたくしにもまったくわかりません」

「口ではそう言っても強がりだとわかるよ。いいか、麻人？ ヘルティーはね、姉の私が言うのもなんだけど、かわいらしい容姿をしているんだ。もちろん、その容姿を台なしにするほど色々と駄目なんだけど、それでもかわいいい妹だ。もちろん祝福してやりたい！」

「じゃあ、してやれよ」

「だけど素直にできないのが女心なんだよ。妹に幸せになってほしい気持ちと、自分よりも先に幸せになっちゃう妬ましき……そんな感情を抱えて妹に会う勇

「気が私にはない！」

惜しげもなく自分の感情を打ち明けるリオネに麻人は頭が痛くなった。

初めて戦ったときが酷く遠い出来事に思えてならない。

裏切られて途方にくれていた自分に優しい声をかけてくれたこと、魔族と人間の共存という夢を語っていたこと、ともに墮天使に立ち向かったことが脳裏に浮かんで消えていく。そして、思うのだ。

——こいつ、偽物じゃね？

気さくなところは以前からあったが、妹の結婚に女として不安になり暴走する一面を見てしまうとそう思わずにはいられない。一国を治める王がこれでいいのか、とも思う。だけど、このようなりオネだからこそ親しみやすさを持つことも確かだ。

「凄いです魔王さま……ご自身の本心をよくもまあそこまで嘘偽りなく言えますね」

「褒めないでくれ」

「いいえ、褒めてません」

そんなやり取りが聞こえていても、聞こえないふりをして魔王リオネの活躍を必死に思いだすことに専念する。そんな麻人をルリが引つ張る。

「だれが結婚するの？ ルリのしってる人？」

キラキラと瞳を輝かせているルリ。名もない孤児であつた過去を持ち、まともな教育さえしていなかった彼女が結婚を知っていることに安堵した。

「リオネお姉ちゃんの妹が結婚するんだって」

「うわー、うわー！ いいなあ！」

「その人に会いに行くんだけど、ルリも一緒にくる？」

「うん、いきたい！」

「じゃあいこうか。それにしても、いつの間にもリオネとクラリツサは言い争いにもで発展してるんだ？」

聞くに堪えないとは言わないが、年ごろの女性がお互いの黒歴史を暴露しているのは正直どうかと思う。

二人は自分とルリの存在を忘れていたのではないだろうか。ルリはなにを言っているのかわからないようだが、許されるなら耳を塞ぎたいと麻人は心底思った。

「相変わらず騒がしいところだな、ここは」

「うん？」

聞き覚えのない声が突如背後から聞こえた。

咄^と嗟^きにルリを抱えて数歩下がりが魔力を体内に循環させて金剛力を発動すると拳を構えた。

「誰だよ、お前？」

「うわああ！　すぐくカッコいいおにいちゃんだあ！」

麻人の目の前には、ルリの言葉通り美しいとしか表現できそうもない人物が不機嫌な顔をして立っていた。

まるで少女漫画から飛びだしてきたような驚くほどの美少年だった。柔らかそうな癖のあるハニーブロンドの髪は耳を隠す程度に伸ばされ、二重で大きな瞳は青空のように澄んでいる。軍服に似た上下青の衣服に身を包み、腰にはサーベルを吊るしていた。

背丈こそ小柄だが、年ごろは麻人とそう変わらないように見える。だが、おそらく魔族なので実年齢はもっと上だろう。

感じ取れる魔力量はリオネに近い。なによりも麻人を驚かせたのはまったく気配を感じさせずに近づかれ

たことだ。

帝国で保護されてから麻人は常に周囲を警戒し続けていた。リオネたちを信じていないからではない。帝国の民がいい人たちだということもわかっている。しかし、信頼していたアンナ・エルミートの裏切りは麻人の心に傷とトラウマを残していた。

気を張り続けているわけではないが、自分の周囲の気配を気にかけるように無意識にしていたのだ。ルリを妹として迎えてからは意識的に警戒をしていた。もちろん、ルリを守りたい一心からだ。

今だつてそうだ。クラリッサと洗濯物を干しているときでも、リオネの行動に呆れていたときでも、常に警戒心が麻人の中にあつた。

だが、その警戒心を目の前の人物はぐり抜けたのだ。今、こうして対峙しているにもかかわらずうまく気配を感じ取ることができない相手に戸惑っている。幸いと言うべきか、魔力知覚がクラリッサと魔力共有してから敏感になったおかげで魔力だけははっきりと感じることができている。



それでも目の前に立つ美少年が、ここにいることに自信が持てない。

「ボクはティリウス・スウェルズ。不本意ながら、あそこで醜い言い争いをしている女どもの幼なじみだ」

ティリウスと名乗った少年は、害虫を嘔み潰したような表情を浮かべて、そろそろ掴みあいに発展しそうなリオネとクラリッサを指さした。

「幼なじみ？」

「そうだ。魔王リオネ・シユタインに用があつてきたのだが、あの馬鹿はなにをしているんだ？」

「そんなの俺が知りたいよ。ヘルティーって知ってる？」

彼の言う幼なじみが本当か確かめるためリオネの妹の名をだしてみる。

「リオネの妹だな。あの魔術馬鹿の引きこもりがどうかしたのか？」

「結婚するらしい」

「……引きこもっていても出合いがあるんだな。きつと相手はよほどの物好きか、変態か、もしかしたら別

世界からヘルティーが婚にするために召喚された異形だろう」

少なくとも嘘はついていないとわかった。ただ、クラリッサとリオネが言ったようなことを、すべてひとりで言い切った口の悪さに絶句する。幼なじみを名乗るティリウスにとつてもヘルティーの印象は魔術馬鹿の引きこもりらしい。少しだけ会うのが怖くなつてしまった。

「引きこもりの話はどうでもいい。それよりも、貴様はいつまでボクに敵意を向けているつもりだ？ リオネの幼なじみと言っただろ。わざわざ無駄話に付きあつてやつたんだ。早くあの馬鹿二人の争いを止めてこちらに連れてこい」

ティリウスの上からの物言いに少しムツとするが、腕の中にいるルリがいる手前余計なことを言わず素直に従うことにした。

「おい、人間。いい忘れていたが、リオネとクラリッサにお祖母様からの命を受けてきたと言え、そうすれば話を聞くだろう。それでも無理ならボクが許すから

殴り飛ばせ」

「お祖母様？」

「貴様が気にすることではないが、どうせリオネから聞くことになるのだろうな。ボクの祖母は、この帝国の建国者である初代魔王草薙健流の妻ツェリア・スウエルズだ」

「――まじ、かよ」

初代魔王の妻がまだ健在だということに心底驚く。そのツェリアの命を受けて現れたティリウスの存在に麻人は不安を抱くのだった。

*

「久しぶりだね、ティリウス。何年ぶりだろう？ 会えて嬉しいよ」

今までの醜態をなかつたことにしてリオネがティリウスに微笑む。幼なじみというだけあって、彼女からティリウスへの態度は気安さを感じさせる。

しかし、ティリウスはそっけなく鼻を鳴らす。

「ずいぶん会っていなかったのは確かだが、ボクはお前たちになど会いたくなかった。お祖母様の命がなければスウエルズ領から帝都まででてくるはずがない」

「相変わらずだね」

ティリウスの態度に気を悪くすることなく、むしろ懐かしそうに目を細めるリオネ。彼女だけではない、麻人の隣でルリと手をつないでいるクラリッサもまた同じだった。

「クラリッサたちって付きあい長いの？」

「そうですね。わたくしとリオネさまは幼少期から今までずっと一緒ですが、ティリウスさまは幼少期こそ一緒に過ごされましたが、少しずつ会うことが少なくなっていました。手紙のやり取りは続けていましたし、年に数える程度ですがお会いになっていきました。が、ここ数年は顔をあわせることはありませんでした」

話をしているリオネたちの邪魔にならないようにクラリッサと会話を続ける。

「ティリウスさまはスウエルズ領で生活していますので、帝都で暮らすわたくしたちではどうしても都合が

あわないことが多いのです」

「スウェルズ領っていうのは？」

聞き慣れない言葉に麻人は疑問符を浮かべる。

「そういえば、麻人さまにはそのあたりのご説明がまだでしたね。帝国に暮らす魔族と言っても多くの種族が暮らしています。わたくしたちのような混血種族からエルフ、精霊、鬼、吸血鬼、人間と把握するだけでも大変な数の種族がいます」

「クラリッサは混血種族って言うんだ？」

魔族という種族がないことは知っていたつもりだったが、改めて多くの種族が魔族として扱われているのだとわかる。クラリッサに関しても、今まで混血種族という名を聞いたことがなかった。

リオネは初代魔王草薙健流の子孫であり、日本人前原梨香子の娘だ。確かに混血と言えそうなのだろう。実を言うと人間とハーフくらいにしか気にしたことがなかった。

思い返せばクラリッサもリオネの従姉妹なのだ、初代魔王の血を、日本人の血を引いている。

「はい。リオネさま同様に異世界人の初代魔王さまを先祖に、父は混血種族で母はエルフですので、私もまごうかたなく混血種族なのです」

「知らなかったよ」

「便宜上の種族ですから、知らなくて当然です。帝国建設前ならいざしらず、現代では混血は珍しくありませんよ」

確かにルリも魔族と人間のハーフだ。ドルノワってそうだ。

帝国という多くの種族が暮らす国では自然と血が混ぜられていくのだろう。

「話を戻しますと、帝国を建国し魔王として君臨した初代魔王さまですが、彼に協力した種族はたくさんいました。妻となり支えた吸血鬼一族のツェリアさまが人間たちにも有名です。初代魔王さまは力を持つ一族たちの長に領地を与え、ご自身は帝都で最低限の指示しかしませんでした」

「スウェルズ領っていうのは、じゃあそのツェリアっていう初代魔王の奥さんをはじめとした吸血鬼の領地

なんだ？」

「そういうことになります。もちろん、帝国を治めているのはリオネさまですが、ひとりでは帝国すべてに手が回りません。ですので、各種族の長の協力は必要不可欠なのです」

麻人は国の運営などはつきりいつてわからないので、リオネを総理大臣に、各領地のトップを県知事という形で自分なりに飲み込んだ。

「ティリウスに言われたんだ、初代魔王の奥さんツェリア・スウェルズの命令できたって。それってまだ初代魔王の奥さんが健在ことだよね？」

「もちろんご存命です。ティリウスさまのお祖母様であられるツェリア・スウェルズさまは純血の吸血鬼です。ですので、帝国に暮らす一般的な吸血鬼よりもはるかに寿命は長く、そしてお強い方です。わたくしも大変かわいがっていただきました」

改めて魔族が人間と違うと言われる理由がわかった気がした。

魔王でありながら人間だった初代魔王は昔に他界し

ている。だが、彼の妻は現在も生きている。この寿命の違いは大きすぎる。

「ツェリアさまは吸血鬼一族の当主としてスウェルズ領を治めています。実際は相談役という形です。次期当主であるご子息さまにお任せする形で半ば隠居しておられます。ティリウスさまはツェリアさまにとてもかわいがられていて、次期当主になるのではないかと噂されることもあるのです」

「そんな人からの使いつて、きつと大ごとなんだろうな」

「ティリウスさまご自身が直接リオネさまにお会いになられるほどのなにかが起きている——のかもしれないせんね」

麻人は不安になった。墮天使と戦ったときよりもずっと嫌な予感がして心がざわつくのを抑えられない。

「麻人！」

リオネが麻人の名前を呼んだ。表情は固く、どこか緊張しているようにも見える。彼女の隣のティリウスは変わらぬ不機嫌な顔をいっているが、雰囲気は先ほど

と少し違つた。

「どうした？」

「屋敷の中でゆつくり話そう。少々厄介なことになつてしまつた」

やっぱり、と思つてしまふ。自分の不安も、クラリツサの予想も、すべて当たつてしまつたようだった。

*

大人しいと思つていたらルリは麻人とクラリツサに手をつながれながら立つたまま眠つていた。

器用だ、と苦笑しながら麻人は抱きかかえる。

フルーツを食べることを楽しみにしていたのにかわいそうなことをしてしまつたと反省しながら、起きたらたたくさん遊んであげようと思う。

クラリツサがお茶の支度をするため一足先に屋敷の中に戻つていく。

「そういえば、貴様はリオネが保護した人間だったんだな」

隣を歩いていたティリウスが不機嫌な声をかけてきた。

「そうだけど、なにか？」

「聞けば墮天使を屠つたそうだな。人間にしては相当の戦闘力を持つようだが……リオネ、本当にコイツにも話をしなければいけないのか？」

品定めをするような視線を受けて苛立ちが湧き上がってくる。ルリを抱えていてよかつたと思つた。

ティリウスの言葉からは、かつて敵対していた勇者叶海麻人に対する感情ではなく、人間そのものにマイナスな感情を持つているように感じた。

「先ほども言つたけど、麻人がいたからこそ先日の墮天使も倒すことができたんだ。キミの人間嫌いは相変わらずだからしかたがないとしても、麻人を見下すような態度は許せないよ」

「……悪かつたな」

それだけ言うとティリウスは麻人とリオネを置いて先にいつてしまつた。

「すまない」

「別にリオネが謝ることじゃないだろ」

「ティリウスは私の大切な幼なじみだからね。あの子は人間が嫌いだ、心から嫌いなわけじゃないんだ。その、私からは言えないが、色々あったんだ。もしかすると不愉快に思うことがあるかもしれないけど、できれば我慢してほしい」

「別にいいよ。ああゆうツンケンした奴は初めてじゃないから」

思いだすのは、まだアンナたちと旅していたころの記憶。貴族の家系に生まれ、騎士として育った少女は、異世界人の自分を信用できないと言ってよく突っかかってきたものだ。

彼女は今どうしているのだろうか、と心配になる。

麻人の仲間で、アンナが裏切ったあの場に居あわせなかった彼女は、死んだことになっている自分のことをどう思っているのだろう。悲しんでくれているのか、それとも清々したと笑っているのか、もしかすると勝手に死んだと怒っているのかもしれない。

よくも悪くも真っ直ぐだった少女のことを思いだし

ていると、前を歩いているティリウスが突如倒れた。

「ティリウスっ?」

「お、おいっ、どうした!」

慌てて駆け寄り、リオネがティリウスを抱き起こす。彼の顔は真っ青だ。具合が悪いのは一目瞭然で、呼吸も荒い。

「おいおい、どうするんだよ。医者か、それとも治療魔術が使える誰かを呼べばいいのか?」

ルリを抱きかかえながら慌てた麻人の足を顔色の悪いティリウスが掴む。

「うるさいぞ……人間……静かに、しろ」

「だけど……」

「構わなくていい……いつものことだ」

「まさか、ティリウス、もしかしてキミは……」

原因に気づいたらしいリオネの呟きに整った眉を歪めると、

「クソッ、お前の考えている通りだ。そうだ……血が足りない。血をよこせ……」

弱々しくも不機嫌な声でティリウスは小さく呟いた。

*

「吸血衝動を我慢して倒れるなんて、キミは相変わらず強情とか意地っ張りだね、ティリウス。一言血を用意しろと言えればいいのに」

「うるさいっ……この程度大したことはない！」

客室のベッドに力なく横たわるティリウスだが、口では強がりながらも真つ青な顔は相変わらずだ。

「麻人がここまで運んでくれたんだ。あとで礼を言うことをお勧めするよ」

「誰が、人間などに」

「相変わらずだね。以前はあれほど人間を愛していたのに」

リオネは困ったように笑う。

「なにか勘違いしているようだが……ボクは昔も今も人間など大嫌いだ」

「わかったよ。そういうことにしておこう」

黙り込んでしまった幼なじみを気づかうようにリオ

ネも口を閉ざす。まだ心も体も幼いころのティリウスを思いだす。当時のティリウスは人間を愛し、人間の親友もいたのだ。

性格も今よりも柔らかく笑顔を絶やさない子だったのが変わってしまったのも、やはり人間がきっかけだった。

よいことも悪いことも魔族は人間に影響されているのだと思わずにいられない。

人間を嫌いだと公言しながら、誰よりも人間を気つかい守ろうとしているのもまたティリウスであることをリオネは知っている。

実を言うならリオネは麻人とティリウスを会わせたいと思っていた。自分やクラリッサ、そしてエリザヴェータが変わったように、ティリウスも麻人と接することで変化があるかもしれないと期待していたのだ。数年ぶりに会った幼なじみの態度は頑なで、麻人が

印象を悪くしていなければならないと思う。

「リオネさま、血液の準備ができました」

思考にふけっていると、グラスを持ったクラリッサ

が部屋の中へ入ってくる。

血の匂いが鼻孔を刺激しリオネは眉をしかめた。

「この匂いだけは好きになれないね。よくキミたち吸血鬼は血液を飲めるものだと感じてしまうよ」

「ボクだって好きで飲むわけじゃない。だが、飲まなければならぬ種族なのだからしかたがないだろ」

ベッドから体を起こし、ティリウスは忌々しげに顔を歪めた。

「吸血鬼の血を引きながら、吸血衝動がないお前たちが羨ましくなる」

「キミを見ていると吸血衝動がなくてよかったですかと思ふよ」

「わたくしも同感です」

「同じ初代魔王とお祖母様の血を受け継ぎながらどうも体質に差がでるとはな……」

クラリッサからグラスを受け取り、口をつけようとして手を止めた。

「クラリッサ、この血は誰ものだ？ まさかとは思いますが、あの人間のものじゃないだろうか？」

「安心してください。わたくしの血液です」

「この屋敷に血液提供者はいないからね、クラリッサに頼んだんだよ」

「……すまない」

短い感謝の言葉とともにグラスに入った血液を、喉を鳴らして飲んでいく。あつという間にグラスを空にする、と、みるみる血行がよくなつていくのが目に見えてわかった。

青白かった顔に赤みが差していく。

「改めて吸血鬼という種族が面倒だということを確認できたよ」

「うるさい！ お前たちだって吸血鬼の血を引いているじゃないか！ 吸血衝動がないくせに、吸血鬼の身体能力と魔力のいいところだけ持っているのはあまりにも不公平だ！」

「うん、それだけ大きな声をだすことができるならもう大丈夫だね」

リオネもクラリッサもそしてティリウスも、初代魔王草薙健流とその妻であり純血の吸血鬼であるツェリ

ア・スウェルズの血を引いている。しかし、リオネとクラリッサには他の種族の血も混ざっており、ゆえに混血種族と呼ばれるのだが、ティリウスは違う。

人間の血こそ入っているが、ティリウスの両親はともに吸血鬼だ。純血ではないが、吸血鬼としての血は二人に比べるとだいぶ濃い。そのため吸血衝動という厄介なものまで引き継いでいるのだが、吸血鬼特有の強力な魔力と再生能力も兼ね揃えている。

一方、リオネたちは吸血鬼としての血は濃くないが、強力な魔力と身体能力、そして回復力だけを都合よく引き継いでいる。不公平だ、とティリウスが言うのも無理もない。

「おい、クラリッサ」

「なんででしょうか？」

「体調でも悪いのか？ 血の味が以前と比べて変わったように思えるんだが」

「どのようにでしょうか？」

ティリウスは腕を組んで言葉を探す。

「そうだな、血液中の魔力濃度が若干薄くなった、い

や、血の味そのものが変わったように思えるな。なにか特別変わったことでもあったのか？」

「そ、それはですね……」

気づかうティリウスの問いかけにクラリッサは口ごもる。ここ数年で変わったことといえば心当たりはひとつしかないのだが、それを口にするのはいささか躊躇ためちいが生じてしまう。

「魔力共有をしたんだよ。つまり、クラリッサは初体験を終えて大人の女に進化したのだ！」

「ちょ、ちょっと、リオネさま！ なにを勝手に言っているのですか！ 仮にも人のプライベートをそんなあっさりと！」

「構うものか！ 帝国の主要人物はほとんど知っていることじゃないか！」

「ほとんど知っているのですか!？」

顔を真っ赤にして抗議するクラリッサは、自分の初体験が予想以上に伝わっていることに目を丸くして驚いた。

すると、笑い声が部屋の中に響く。

「お前たちは昔のままだな。リオネがクラリッサをか
らかい、クラリッサはすぐムキになる。それで結局、
いつもクラリッサが武力行使にでてリオネが泣くん
だ」

「いつもではありません！ それに、リオネさまが魔
王になってからは極力暴力に訴えることは控えていま
す」

「極力控えているだけであって何度かやられているぞ。
クラリッサは魔力も身体能力も規格外なんだから加減
というものを覚えてほしい」

「やはりお前たちは変わらないな。少しだけ鬱陶しい
が、毎日が楽しそうだなによりだ」

「鬱陶しいは余計だよ」

「それにしても、なるほど、クラリッサが初体験を終
えたのか、しかも魔力共有とは古い婚姻の儀式だった
な。血液の味が変わるのもしかたがない——ん？」

リオネの屋敷にきてから初めて笑ったティリウスが
笑顔のまま凍りついたように動きを止めた。

次の瞬間、

「ちよつと待てええええ！ クラリッサが初体験を終
えて、魔力共有までしているだどつ？」

「だからそう言ったじゃないか。なにを今さら」

真つ赤になって大声をあげるティリウスにリオネが
呆れた声をだす。

「よくよく考えればとんでもないことではないか！
あ、相手は誰だ？ 仮にもクラリッサは初代魔王と吸
血鬼の王族の血を引いているんだ。どこの馬の骨とも
わからない相手だったらただじゃおかないぞ！ ま、
まさかあの異世界人じゃないだろうなっ？」

「さ、さあ、どうなのでしょうね」

問い詰めてくるティリウスの視線から逃げるように
横を向くと、吹けもしない口笛を吹こうして、ひゅー
ひゅーとむなししい音を立てる。

わかりやすく誤魔化そうとするクラリッサの態度に
ティリウスの額に血管が浮きでた。

「誤魔化すな！ 認めないぞ！ いくら異世界人とは
いえ、人間に体を許しただけならいざしらず、魔力共
有までするなど！」

「まったく……キミの人間嫌いはいつになつたら直るんだらうね」

「病気みたいに言うな！」

声を荒らげるテイリウスを落ち着かせようとリオネが言葉をかけるも、逆効果になっていることに気づいていない。

「いいじゃないか人間だつて。まさかとは思うけど、キミは麻人が勇者だつたことを責めるつもりじゃないだろうね？ 戦場に立たなかつたキミに彼を責める権利はないよ」

「ふざけるな！ あの男の事情を知っているボクがそんな恥知らずなことをするわけがないだろう！ 人間は嫌いだが、叶海麻人の境遇には同情している。だが、それとクラリツサとの関係は別の話だ！」

「まったくヘルティーと同じで引きこもりのくせに、貴族意識だけは高いのだから困り者だね」

「あんな引きこもりと一緒にするな！ ボクは領地からでないだけだが、アイツは家からでないじゃないか！ 断じてボクは引きこもりではない！」

「どちらも大差はありません」

引きこもり扱いされて激昂するテイリウスにクラリツサが毒を吐く。

クラリツサにとつて愛する麻人が人間という理由だけで関係に文句を言われるのは面白くなかつた。

息を切らせたテイリウスが呼吸を整えると、クラリツサに対して真面目な顔をして言葉を放つ。

「はっきり言えば、人間だから駄目だと言いたくはない。愛しあっているならなおさらだ。だが、いつか人間はボクたちの心を裏切るぞ。どれだけこちらが想っていても、人間にはその想いを受け止めることができない」

「麻人さまは違います！」

「ボクもかつてはお前と同じように思っていた。だが、実際はどうだ。お前も知っているはずだ、ボクは裏切られた。人間が嫌いだから言うのではなく、お前が傷つかないために忠告しておく、引き返せるなら引き返せ」

「引き返す気など毛頭ありません」

断言するクラリッサに、鼻を鳴らしてティリウスは不機嫌な表情を浮かべた。不貞腐れた顔を見ると、「なら勝手にしろ！」

と、言っつてベッドに横たわり毛布にくるまってしま

う。

「おい、ティリウス」
「しばらく眠る！ 帝都にくるのに一晩馬を走らせたんだ、ボクは疲れた！」

感情むきだしのティリウスに、キミも昔と変わらな

いよ、と内心呟きながらため息をつくりオネだった。

*

「キレイなおにいちちゃんが突然倒れたから、びっくりしちゃったね」

「そうだね。でも、クラリッサたちが言うには貧血みたいなの——って難しいか、えつとちよつと気分が悪くなっただけだから少し寝てれば大丈夫だつて」

「そっかー。ならよかつたねー」

目の前で倒れたティリウス・スウェルズを客室のベッドに運んだ麻人だが、クラリッサとリオネに食堂で待つていてほしいと頼まれ部屋をあとにしていた。

麻人自身、ルリを食堂に残していたのでいつまでも客室に留まるつもりはなかったのだが、なぜそんなことを言われたのか不思議に思えた。もしかしたら大事な話があるのかもしれないし、種族特有のなにかがあるのかもしれない。

しかし、言葉にはできない複雑な感情が胸の中で渦巻いているのを自覚していた。

美少年としか言いようがないティリウスのそばにクラリッサがいる。もちろん、リオネだっているのだが、それでもおもしろくないと思つているのだ。麻人は自分が嫉妬心を抱いていることに驚きながら、改めてクラリッサに入れ込んでいるのだと知つた。

幼なじみであることはわかつているし、気心の知れた仲なのかもしれないが、倒れたティリウスを心から心配していたクラリッサの姿が脳裏から離れない。そして、誰にでも親切で優しい彼女のことを好きであり

ながら、そんな彼女を独占したいと思っっている自分の願望に気づき、呆れてしまった。

「俺には独占する資格なんてないのに……」

クラリッサだけではなくエリザヴェータのことも愛して関係を持っている自分が嫉妬心を抱くのはあまりにも身勝手だと思えてならない。

傲慢さを確認してしまい、思わずため息をついてしまふ。

「どうしたの、おにいちゃん？」

「なんでもないよ。ほら、これも食べて」

「ありがとう！」

ルリは約束通り、フルーツを食べて満足そうだ。先日、山で取れたと聞いた葡萄は日本で食べていたものと遜色なく美味しかった。ペろり、と平らげてしまったルリの前に麻人はほとんど手をつけていない葡萄の皿を移動させる。

「食べていいの？　でも、おにいちゃんのがなくなっちゃうよ？」

「俺はお茶があればいいから、気にしないで食べて」

「うん！　ありがとう！」

嬉しそうに葡萄を食べ始めるルリを見て麻人の表情がほころぶ。ルリが笑顔でいてくれるだけで、自分も自然と笑顔になる。嫉妬心と自己嫌悪感を和らげられる作用がルリの太陽みたいな笑顔にはあるのだ。

さらさらした黒髪を撫でるとくすぐったそうにルリが身をよじる。食べているのに邪魔かな、と思いい手を止めると、ちよつと不満そうな表情を浮かべて、

「もつとなでてほしいのっ」

「はいはい、お姫さま」

ルリの要求通り、再び髪を撫でると、満足しながら葡萄を食べ続けた。

片手で紅茶を飲みながら、妹っていいなあと思っっていたそのとき、

「おまたせしました、麻人さま、ルリさま」

「あつ、おねえちゃん、お帰りなさい！」

食堂にクラリッサが戻ってきた。リオネとティリウスの姿はない。まだ具合が悪く、リオネがつきそっているのだろう。

「葡萄酒は美味しいですか？」

「うん！」

「それはよかったです。わざわざエリザヴェータに取りにいかせた甲斐がありました」

「取りにいったのはエリザヴェータだったんだ……」

基本的に自由気ままに行動しているエリザヴェータなので驚きはしない。今日、狩りをしているのも、もしかしたら山にいったことで狩猟本能が刺激されたのかもしれない。

「あとでお礼を言っておかないとな」

「うん！ お犬のおねえちゃんにありがとうって言うの！」

きつと「お犬のおねえちゃん」と言われてしょぼくれるのは目に見えている。ルリにとってエリザヴェータは狼ではなく犬だという認識が定着してしまっている。エリザヴェータはなんとか間違いを正そうと奮闘しているのだが、未だ改善される見込みはない。

「ティリウスはどう？」

「あの子ならもう大丈夫ですよ。血を飲ませたのです

っかり元気です。今は少し不貞腐れて寝ていますが、話さなければならぬこともあるようですのでリオネさまがそのうち叩き起こすでしょう」

「血を飲ませたって、どういうこと？」

麻人の問いかけに、クラリッサが説明し忘れたことに気づき説明をはじめた。

「麻人さまも初代魔王さまの奥さまが吸血鬼であることは存じていると思いますが、孫にあたるティリウスさまも同じく吸血鬼です。吸血鬼には吸血衝動というものがあり、定期的に血液と血液中に含まれる魔力を摂取しなければなりません」

「吸血衝動を我慢したからティリウスは倒れたってこと？」

「そうです。初代魔王さまとツェリアさまの血を引いているのはリオネさまだけではなく、わたくしも同じです。しかし、あくまでもわたくしたちは混血種族ですから、他の種族も受け継いでいます。そのおかげか、吸血鬼特有の吸血衝動はありません。ですが、ティリウスさまは違います。四分の一は初代魔王さまの間

の血を引いていますが、吸血鬼の血が濃いため衝動が定期的に起きてしまうのです」

吸血鬼の血が濃いためティリウスは吸血衝動が起き、吸血鬼の血が薄いためリオネとクラリッサには吸血衝動がないということだ。

「とくにティリウスさまは潜在能力だけなら純血の吸血鬼を優にしのに、現当主であるツェリアさまに匹敵しています。それゆえに吸血衝動も強く、不安定なのです」

「彼も大変だな」

「——え？」

吸血鬼という種族なのだから血を吸うことは予想できるとは、まさか吸血衝動があることや、我慢すると倒れてしまうことを考えると厄介な体質だと心底思った。そんな麻人になぜかクラリッサが驚きの声をあげる。「どうしてそんなに驚くの？ 俺、変なこと言った？」

同情したわけではないが、もしかすると言い方がまづかったのかもしれないと反省した。種族によって体質が違うのはこちらの世界では当たり前だ。草食系の

獣人が野菜を好み、肉食系の獣人が肉を好むように、吸血鬼が定期的に血を摂取することは自然なのだ。それを大変だと思うのは失礼に当たるとはかもしれない。

しかし、

「いえ、その、麻人さまはなにか誤解されているようです」

「誤解って？」

「ティリウス・スウェルズさまは彼ではありません、彼女です」

「へ？」

「ティリウスさまは女性ですよ！」

「え……うそ？」

麻人はクラリッサの言葉が信じられなかった。

少女漫画から飛びだしてきたような、ブロンドの美少年がまさか美少女だったとは思いもしなかった。あまりにも容姿が整いすぎていて、女性だとわからなかったのだ。

思い返せば、倒れたティリウスを抱きかかえたとき、あまりにも体が華奢だった。客室に運んだあとも部屋

から出るように言われた理由も女性なら納得だ。

「カッコいいおにいちゃんつておねえちゃんだったの？ ルリ、ぜんぜんわからなかった！」

ルリの声を聞きながら、判断材料があったにもかかわらず気づくことができなかった自分が酷く間抜けに思えた。

*

昼も近くなりそろそろリオネもくるだろうと、クラリッサが焼き菓子を用意してくれた。

焼き菓子を頬張るルリの口まわりを手ぬぐいで拭きながら、麻人も一緒に食べる。濃厚なパターの味とナッツの食感が絶妙で美味しかった。

とはいえ、いつまでも食べているわけにもいかない。とくにルリはもう葡萄を食べているのだ。昼食が待っているでこれ以上はお腹いっぱいになってしまう。クラリッサにこっそり目配せして、ルリに気づかれ

ないように焼き菓子を遠ざけてもらう。

紅茶を飲みながらリオネたちを待っていると、足音が近づいてきた。ひとつは軽やかな足取り、リオネだ。もうひとつはブーツの踵を鳴らして機嫌が悪い足音が聞こえる。おそらくティリウスだろう。

「待たせてしまったね、すまない。ティリウスが駄々をこねるので手を焼いていたんだ」

「ボクを子供のように言うな！」

「まったく、騒がしいですね」

「元氣いっぱいだね！」

青い軍服風の服を纏^{まと}う美少年——いや、美少女ティリウス・スウェルズがリオネに嘔みつくも、先ほど倒れたときに見た青白かった顔も今は血行よく赤みが差している。

麻人はじつと彼女を観察した。

一度見たら忘れられないだろう整いすぎた美しい容姿、二重の大きな青い瞳、ハニーブロンドの柔らかい髪はショートに揃えられている。わずかにしか見えない肌は穢れを知らないように白かった。

服のせいで少年という印象を抱いてしまったが、小

柄な体軀は細く、じつくり見つめればわずかに、本当にわずかにだが胸にも膨らみがある。

「おい、人間。なにを見ている？」

「あ、いや、なんでもない」

不機嫌なハスキーボイスとともに睨まれ、咄嗟に目を逸らす。よくよく思えば、女性の体を観察するのは失礼だ。

「キレイなおにいちちゃん……じゃなかった、おねえちゃんはもうぐあいわるくないの？」

「ボクのことか？」

「うん」

「大丈夫だ。心配してくれたのなら礼を言う」

ルリのそばに寄り、目線をあわせたティリウスは感謝の言葉とともに頭を撫でた。くすぐったそうにするルリは嬉しそうで、釣られてティリウスもまた頬を緩ませた表情はまさに少女だった。

優しい表情もできるんだな、と麻人はつい見とれてしまった。

「素直にありがとうと言えばいいのに」

「うるさい！ いや、ちよつと待て。今、ボクのことをお兄ちゃんと言わなかったか？」

「あのね、わたしもおにいちちゃんも、キレイなおねえちゃんのことをカッコいいおにいちちゃんだと思ってたの。まちがえてごめんね」

「ちよつと待つてルリ、さらつと俺のことまで暴露しないで！」

慌てる麻人だがすでに遅い。

笑顔を浮かべていたティリウスは一変して麻人を睨み殺せそうな眼光で射貫く。

「ほう……貴様はボクを男だと思っていたのか……」

「いや、その、だつて、自分のことボクつて言っているし、服装だつて軍服みたいだし、顔だつて整いすぎている性別がわからなかったんだよ！」

ルリを撫でていたティリウスの右手が麻人の肩を掴み、ミシミシと音を立てる。彼女の細い体のどこにこれほどの力があるのか不思議なほどの痛みに声をあげたくなるが奥歯を噛みしめて堪える。

悲鳴を必死に噛み殺すのは、不思議そうにこちらを

窺っているルリがいるからだ。

「よく声をあげないものだ……今回は許してやるが、次はないぞ」

「あ、ありがとうございます」

「ごめんね、おねえちゃん」

「いいんだ。誰にでも間違いはある。気にしなくていい」

「俺とルリとでずいぶんと態度が違うな、おい！」

抗議の声をあげると、肩が砕けるのではないかと思うほど力を込められてしまうが、すぐに緩んだ。

ティリウスは麻人の肩から手を離すと、ハンカチを取りだして手を拭き始める。

あまりに酷い扱いにもう一言くらい文句を言つてやろうと思つたが、剣呑な眼光で睨まれてしまい言葉を飲み込んだ。

「すっかり仲よくなつてくれたみたいでなによりだよ」

「ええ、妬けてしまいますね」

微笑むリオネとクラリッサだが、彼女たちには本当

に自分たちが仲よく見えているのか疑いたくなる。

「ところでリオネさま、ティリウスさまが倒れてしまったので先延ばしになっていましたが、ツェリアさまのご用件をお聞きにならなくてもよろしいのでしょうか？」

「実は、ここにくる前に聞いたよ」

「リオネ、ボクが話そう」

リオネの言葉を遮るティリウス。彼女は空いている席に座ると、リオネたちにも座るように言う。クラリッサは二人分のお茶の支度だけすませるとルリの隣に腰をおろした。

「強硬派が動き出した」

「……それだけ？」

「他になにをどう言えと言うんだ！」

簡潔すぎる一言について麻人は言葉を挟んでしまった。もちろん、ティリウスは不機嫌に声を荒らげる。

「きょーこーはつてなに？」

しかし、ルリが尋ねると丁寧に説明をはじめ。

「強硬派とは魔族の中でも過激な思想の持ち主だ。現

魔王、つまりここにいる行き遅れのリオネ・シュティン
ン人間と手を取りあい和平を叶えようとしている。
これは歴代の魔王が叶えようとしていたことなので民
も賛成している。だが、徹底して人間と戦うべきだと
声を荒らげる者もいるんだ。強硬派と言えは聞こえが
いいのかもしれないが、ボクに言わせれば魔王に従わ
ない反乱分子だ」

「……ルリ、わかんない」

「そうだな、わかりやすく言えば、みんなで決めたこ
となのに嫌だとわがままを言っている悪い奴らがいる
ということだ」

「おおつ、なるほどー！ みんなといっしょがいいよ
ね。わがままはだめだよ！」

「ほらな、子供でもわかることがわからない者がいる
のだ。今まではお祖母様が強硬派を抑えていたが、こ
こにきてそろそろ抑えもきかなくなった」

「なぜでしょうか？」

クラリツサの問いに、ティリウスは麻人を睨む。

まさか、と嫌な予感が脳裏をよぎった。

「この人間を馬鹿な魔王が引き入れたからだ」

「俺のせいだよ……」

嫌な予感の中にした。思わずうなだれてしまう。

落ち込まずにはいられない。リオネが救い、クラリ
ツサによって助けられた自分のせいで厄介事を引き起
こしたとわかったのだ。二人の顔をどう見ればいいのか
わからない。

帝国に留まったことは間違いだつたのではないかと
思ってしまった。

「馬鹿か貴様は？ 誰が貴様のせいだと言った？」

「いや、だけど……」

麻人に声をかけたのは、リオネやクラリツサではな
くティリウスだつた。

「確かに敵対国の勇者であるお前を魔王が引き入れた
ことがきつかけだつた。しかし、きつかけはきつかけ
でしかない。強硬派の連中は理由になればなんでもい
いのだ。たまたま人間の元勇者というわかりやすい理
由ができたから行動を起こした、それだけだ」

「ティリウス、お前の言い方はわかりづらい。はじめ

からそう言つてやれないのかい？」

「うるさいっ！ いいか人間、強硬派などと下手に名前がついているからそれらしく聞こえるが、先ほども言つた通り所詮、国に従わずわがままを言っているだけの奴らだ。貴様が気にすることではないし、いずれ戦うときがくれば遠慮なく叩き潰せばいい」

慰めでもなく激励でもなく、ティリウスはただありのままを述べてくれた。下手な氣づかいなど一切ない彼女の真つ直ぐな感情は少しだけ麻人の心を軽くしてくれる。

「ティリウスさま、ツェリアさまはわざわざ強硬派の動きを教えるためだけにあなたをよこされたのですか？」

「それもある。だが、お祖母様はリオネを手伝えとも言つた」

「キミが、私を？」

「光栄に思え。無能で行き遅れの魔王が手こずっている反乱分子をボクが片づけてやろう」

胸を張つて自信満々に宣言するティリウスに、リオ

ネが頬を引きつらせる。

「キミが力になつてくれるのは実にありがたいよ。だけれどね、さつきから私のことを行き遅れ、行き遅れと連呼しないでくれるかな？」

「だが事実だ」

「いいだろう……本当に私が無能な魔王かどうか見せてあげようじゃないか。久しぶりに手あわせをしよう、ティリウス」

「ふんっ。構わないぞ、だがボクに負けて泣くなよ、行き遅れ」

揃つて椅子から立ち上がると、睨みあうリオネとティリウス。

行き遅れと言われて怒り心頭しているリオネの体を、音を立てて紫電が走る。

「魔王の力を見せてあげよう」

「吸血鬼の力を舐めるなよ」

互いに敵意むきだしのまま食堂をでていつてしまった二人を呆然と見送ると、困つたようにクラリッサに視線を向けた。しかし彼女は呆れたように首を横に振

るだけ。

「ふたりは仲よしだねっ」

唯一ルリだけが笑顔のまま、手を振ってリオネたちを見送っていた。しかし、麻人もクラリッサも同意はできなかった。

*

リオネとティリウスの戦いは決着がつかなかった。双方全力をだしたわけではないが、周囲に被害を及ぼさない限り本気で戦っていた。そして、今、二人は息を荒らげて庭で倒れている。

麻人の目にはティリウス・スウェルズがリオネに匹敵するほど実力を持っているように映った。無論、全力ではないし、命の奪いあいをしていくわけでもない。で、本当の意味での実力までは把握できないが、それでもクラリッサと魔力共有する前に自分と遜色ないのではないかと思えた。

「おねえちゃんたちはつよいんだね！」

「ああ、強いね」

リオネは有する強大な魔力を生かした魔術を得意とし、ティリウスは吸血鬼特有である身体能力と再生能力を駆使した戦い方だ。距離があればリオネが、近づけばティリウスが有利だろう。だが、ティリウスも何度か魔術を使おうとしている場面があつたので魔術が使えないわけではないはずだ。

なぜ使わなかったのかまではわからないが、吸血鬼は魔力保有量が多いらしいので彼女もまた相応の魔術の使い手だと見て取れた。

「ティリウスさまは吸血鬼の中でも当主のツェリアさまに継ぐ潜在能力の持ち主です。いずれは超えると言われているその力は、同じ血を引き継ぐわたくしたちには受け継がれていません」

「傷が一瞬で治つたりするのも能力？」

「はい。能力といえますか、吸血鬼の体質です。吸血を怠らず万全な状態であれば腕一本を切り落とされた程度では大したことはありません。ですが、わたくしたちやリオネさまにそこまでの再生能力はないので

す。せいぜい他の方々よりも傷の治りが早いくらいでしかありません」

腕一本斬り落とされれば十分すぎるほど致命傷になる。だが、ティリウスは、いや吸血鬼は種族特有の体質のおかげで再生できる。戦闘面においてこの再生力の強さはあまりにも有利だ。

「ところでさ、こんなことしていいいの？」

「強硬派のことを気にしているのですか？」

「気にしないわけにはいかないだろ、だって俺が原因なんだから」

「ティリウスさまも言いましたが、麻人さまのせいではありません。彼らは麻人さまの存在を体よく利用しただけです」

「わかってる。わかってるんだけど……」

麻人も頭ではわかっていた。あくまでも行動を起こしたかった強硬派が自分の存在をきつかけにしただけだということ。それでも、自分さえいなければ、と思っただけで済まわすにはいられなかった。

「考えるだけ無駄だぞ」

悩む麻人に起き上がったティリウスから声がかかる。リオネも同じように起き上がり、揃ってこちらにやってくる。

「どうせ貴様は強硬派に対してなにかしらの備えをしなければならぬと思っているんだろうが、はっきり言って今ボクたちにすべきことはなにもない」

「なんでだよ？」

「それはね、強硬派と言ってもまだ誰も表立った行動をしていないからなんだ」

「正確には、お祖母様がさせなかつたんだがな」

そのティリウスの祖母がもう抑えるのを限界だと思つたからこそ彼女がリオネのもとに遣わされたのだが、彼女たちに焦りはない。

「強硬派、反乱分子たちは集会を開き、計画を練っている者たちだ。奴らは完全に魔王の意向に逆らう反逆者となりえるが、まだ行動を起こしていない以上にもできない。現時点でも捕縛はできるが、不満を解消するために計画だけ考えることで鬱憤を晴らしていたと言われればそれまでだ」

「強硬派と言つても、中には街で暮らす人たちだつて
いる。彼らの場合は人間に対する恐怖から共存など無
理じゃないかと考えてしまい、強硬派の意見に安心す
るだけの者たちばかりだ。いざ強硬派が行動を起こし
てもそういう人たちは追従しないだろうね」

「だからこそ本格的に動いてもらわなければすべてを
把握するのは難しいんだ。なによりも一度でもこちら
がミスすれば強硬派も慎重にならざるをえない。そ
うなれば二度と尻尾を掴めないかもしれない」

強硬派という存在がわかつていながら、彼らが行動
するまでなにもできない。そんなジレンマを抱えなが
ら待たなければいけないのだ。

「強硬派を潰すには、奴らのトップを叩かなければな
らない。トップさえ残れば何度でも強硬派はしつこく
行動し続けるだろう。だからこそ、今は堪えなければ
ならないのだ」

「私だつて早く解決したいと思つているよ。でもね、
短慮な行動は民に被害を与えてしまう。それだけは避
けなければいけないんだ」

「ボクも善良な民を傷つけないとは思つていない。し
かし、強硬派というふざけた反乱分子に属する民は構
わないと思つている。このあたりがリオネとボクの違
いだな」

リオネは強硬派含めて民をすべて傷つけない、
テイリウスは強硬派に属している者は反乱分子として
考えているのでしかたがないと割り切つている。麻人
にはどちらの考えも間違つていないと思えた。けれど、
できることならリオネの意見で物事が進んでほしいと
思わずにはいられない。

「強硬派だつて大切な民だ。話す機会があればわかつ
てくれる可能性だつてあるはずだ」

「だからお前は甘いんだ。歴代の魔王たちが少しずつ
結果をだしてきた人間との共存はあまりにも難しく、
失敗は許されない。そのことを承知しながら反抗しよ
うとする輩やまごをボクは絶対に許すつもりはない」

不機嫌に表情を歪ませてテイリウスはリオネを睨む。
「そんな甘いお前のことがボクは大嫌いだ」

「本当は優しいくせに冷たくあろうとするキミのこと

が、私は嫌いだよ」

「ふんっ、お互い様だ」

揃って嫌いだと言いながら本心からの言葉ではないことは麻人にもわかった。

ティリウスはリオネを気づかい、リオネもまたティリウスの気持ちを理解しているように感じた。

「正直言ってしまうば、ボクだつて人間は嫌いだ。和平ができないならそれでもいいと思つている。しかし、帝国は人間と友好的じゃなければならぬ。すべての国と同盟国になれとは言わないが、味方を増やしておいて損はない」

「言われなくてもわかつてるよ。幸いなことに、魔族を受け入れてくれる国はある。残念なことに徹底して拒否する国もあるけどね……」

「生き物同士なのだから、それもしかたがないことだ。ボクたちが考えなければならぬのは、国のこと、そしてこの国で暮らす民のことだ。民が傷つかず、幸せに暮らすために最良の選択をしなければならぬ。ゆえに、反乱分子はこの国にいらぬ」

はつきり断言するティリウス。彼女もまた帝国と民を心から思つていることが伝わってくる。

「だから貴様にも言つておくぞ、人間」

麻人に向かってティリウスが鋭い視線を向けた。

「リオネやクラリツサはどう思つているかわかつているが、ボクは違う。人間の醜さを知つているし、信用だつてしていない。だから貴様のことも信用しない」

「ティリウス！」

「ティリウスさま、いくらなんでもそれは……」

「黙つてろ！ なによりもリオネとクラリツサはボクの大切な幼なじみだ。もしも裏切つたり、悲しませたりしてみろ、誰に止められようと必ず殺す。いいか、覚えておけ、ボクはいつでも貴様のことを見ているからな」

非難するリオネたちの声を鋭く遮り言い放つた言葉は、幼なじみを思いやる真摯な感情だった。

麻人は彼女の視線を受け止めて、

「約束する。俺は裏切らない」

はつきりと断言する。

「ボクはしばらくここに滞在する予定だ。貴様が本当に信用できるのかどうか見極めさせてもらう、覚悟しておけ！」

第二章 再会

強硬派の動きがない以上、麻人たちにできることはなかった。

すでにドルノワをはじめとする強硬派に属していないとはつきりわかっている者たちが、いつでも動けるように準備だけはできていた。

そして、麻人たちはリオネの妹ヘルティー・シユタインの屋敷の前にいる。

麻人をはじめ、リオネ、クラリッサ、ルリ、そしてティリウスがいる。当初、ドルノワを誘ったのだが、「魔王さまとクラリッサだけでも恐ろしいのに、さらにティリウスさまもいるだと！ そんな悪夢のような面子に加わるなどできない！」と絶叫し、リオネたち三人におしおきされたためこの場にはいない。

彼は万が一に備えてリオネの屋敷に待機している。今ごろ、クラリッサが用意した昼食に舌鼓をうっているはずだ。

リオネたちの幼なじみであるティリウスともドルノワは面識があるようだが、少し苦手意識があるように感じた。いや、リオネたちが集まることに関わりたくないようだったと言わなければならないか。

そんな経緯ののち、麻人たちはヘルティーの屋敷にいるのだが、彼女の屋敷はこぢんまりとしていて、なによりもくたびれていた。

「その、なんていうか色々と消耗した家だね」

「はつきりとポロイと言ってくれて構わないからね」

なんとか言葉を選ぼうとした麻人にリオネが困ったように笑った。

「ヘルティーさまは魔術研究をしていますので、よく魔術を失敗させては爆発を起こしているのです。当初は屋敷の修復をしていたのですが、内面はともかく外面はもうきりがないので諦めました」

「諦めちゃったんだ」

「おうちポロポロ」

説明を聞いて呆れる麻人と楽しそうに笑うルリ。幸いというべきか今日は実験していないのだろう静

かだ。爆発もなければ特別魔力も感じない。自分たちならまだしも、まだ幼く自衛手段を持たないルリがいるのだ、魔術実験の爆発だけは勘弁してもらいたい。

「あのさ、クラリッサ……リオネの妹のことは置いておくとして」

「どうかしましたか？」

「なんで俺、睨まれているの？」

麻人の背中にはティリウスからの視線が突き刺さっていた。

正直、居心地が悪い。悪意こそないが、見張っていると宣言した通りに見張られているのだ。ここまで馬鹿正直に見張らなくても、と思ってしまうのだが、それほどティリウスにとって信用されていないのだと思うと我慢できないこともない。

監視というよりも値踏みされている気分にもなる。信用できない以前になにかあるのかもしれない。「お気になさらず。そういう生き物だと思つて放置してあげてください」

「おいつ、クラリッサ、それと人間！ 貴様たち、今、

ボクの悪口を言っただろう！」

「突っかかってくるけど……」

「多感なお年ごろなので放つておいてあげてくださいい」

「子供扱いをするな！ ボクはもう百六十歳だぞ！ いくらお前のほうが年上でもそこまで変わらないじゃないか！」

「——ん？」

麻人は聞き逃してはいけない言葉を聞いた気がして、ティリウスに振り返る。彼女は綺麗な顔を真っ赤にして怒っていた。元来感情的になりやすいタイプなのだろう。いや、今はそれよりも気になることがある。

「ちょ、ちょっと待った！ 今、お前なんて言つた？ 百六十歳つて本当かよ？」

「どうしてボクが嘘をつかなければならないんだ！ だいたい、貴様は二十歳にも満たない子供なんだからボクを敬うべきだ！」

「えつと……百六十歳のティリウスよりもクラリッサが年上つてことは、え、あれ？」

クラリッサが長寿である魔族だから自分よりも年上だと承知していたが、想像以上に年齢が離れていたことを知ってしまい驚いてしまう。

正直なところ年齢差は気にしていない。驚いたには驚いたが、そのくらいでクラリッサへの好意が変わるほど薄っぺらな想いを抱いてはいない。

しかし、彼女がいつたい何歳なのか気になることもまた事実だ。外見こそ二十歳くらいなのに、いったいどれくらい生きているのだらうと、この機会に年齢の話題を続けたい衝動に駆られた麻人だったが、

「余計なことを言ってしまうましたね。今夜はティリウスさまをもてなすために大好物のフルコースにして差しあげます。わたくしの愛情のこもった料理を心ゆくまで召しあがってくださいね」

目にも留まらぬ速さでティリウスの頭を片手で驚掴みにしたクラリッサの暗い笑顔を目にしてしまい、両手で口を塞いで声をださないように堪える。

ミシミシとティリウスの頭部から軋きしむような嫌な音が聞こえ、麻人の頬が引きつった。改めてクラリッサ

に年齢の話をしなないと誓う。

「痛いっ、痛い！ この怪力女！ なにが好物だ、どうせボクの嫌いなにんにくとネギのフルコースに決まってる！ この性悪陰険年増女！」

ティリウスの暴言にクラリッサの頬が引きつったのを麻人は目撃した。余計なことを言わなければいいのに、とティリウスの短慮を嘆かずにはいられない。

「あら、ティリウスさまは自殺願望があるのですね。初めて知りました。もっと早く言ってくださればすぐに楽にして差しあげましたのに」

「待て、待ってくれクラリッサ！ これ以上はまずい、本当にまずい！ いくらボクが再生能力を持つ吸血鬼でも頭部を破壊されたら再生できるかわからないんだ、やめ、やめて！」

ティリウスの体がクラリッサのか細い片腕だけで宙に浮く。足をパタつかせながら必死に抵抗するも無理だと判断したのかやめてくれと懇願するティリウスの頭部から耳を塞ぎなくなる嫌な音が響いてくる。クラリッサがどれほどの力を込めているのかわからないが、

再生能力を持つ吸血鬼が痛みと不安で涙を浮かべているのだ、想像したくない。

さすがにクラリッサも幼なじみの頭を握りつぶすこととはしないだろうが、念のためを考えてティリウスからそっと視線をずらし、笑顔を浮かべてクラリッサを応援しているルリの目を塞ぐ。

「麻人、さすがにクラリッサもこんなところでティリウスの頭を潰したりしないから大丈夫だよ」

苦笑したりオネが麻人に声をかけ、ヘルティーの屋敷を指さす。

「二人は長くなりそうだから放っておこう。好きなだけ遊ばせておけばいざれ飽きるはずだよ」

それに、とりオネは麻人の耳元でそっと呟いた。

「キミがここにいたらティリウスがクラリッサに謝れないと思うんだ。プライドの高い吸血鬼のためだと思って先にいこう」

「なるほど。じゃあ、先にいこうルリ」

ルリの手を引き屋敷の中へと向かう。

「えー、ルリもつとみていたのに……」

「また別の機会に見せてあげよう。だから今はおねえちゃん和麻人と一緒にいこう？」

「うーん……わかった！」

「いい子だな、ルリは」

「うん、ルリはいい子です！」

リオネはルリの頭を撫でると、麻人と手をつないでいない手を握る。二人に挟まれたルリは嬉しそうにジャンプする。

「麻人に一応言っておくけど、好きな相手に年齢を知られたくないと思ってしまうのは長寿な魔族ゆえだよ。だから、クラリッサに聞かないであげてほしい。いつか教えてくれるはずだからね」

「無遠慮に聞いたりしないよ」

「なら結構。ちなみに、私も年齢の話をされるのが大嫌いだから気をつけるように」

「……はい」

リオネに念を押されてしまい、麻人はただ返事をすることしかできない。ちよつと気にしすぎたら、と思わずにはいられないが年ごろの女性なので今後話題に

は気をつけようと固く誓う。

「ちよつと待て！ ボクをこのまま置いていくつもりか！ 死んだら化けてでてやるからな！」

ティリウスの叫びを聞こえないふりして麻人たちは屋敷の扉を開けた。

*

ヘルティーの屋敷はリオネの屋敷に比べると最低限の物しかなかった。その最低限の物の大半がシーツを被されて埃が溜まっている。しばらく誰も使っていないのがよくわかった。

使用人の姿も見えず、人の気配も麻人たちの近くにはない。

「リオネの妹ってひとりで暮らしてるのか？」

「基本的にはそうだね。クラリッサが定期的にメイドを派遣してくれているんだけど、この屋敷の様子を見れば門前払いを食らっていたのかもしれないね。今日、クラリッサを連れてきてよかったよ」

「わたくしもついてきてよかったと思っています」

ティリウスを引きずりながら遅れて屋敷に入ってきたクラリッサは、屋敷の惨状に眉をしかめていた。

「相変わらずだらしのない奴だ」

襟首を掴まれたままのティリウスが不快そうに吐き捨てる。

見ればルリも埃の匂いが嫌なのか鼻をつまんでいる。屋敷の主を探して各部屋を覗いていくが、どこにも見当たらない。ほとんどの部屋が物置として使われているようで、魔導書をはじめとする書物が所狭しと積み重なっていた。

「あの子が結婚するのはいいんだけど、屋敷がこんな状態で結婚ができるのかな？」

「旦那さまとなる方がよく気になさいませんね」

「ふんっ、片づけられない女に嫁にいく資格はない。ボクでさえ家事はできるぞ！」

遠慮のない物言いをする幼なじみ三人組に対して、麻人はあえてなにも言わなかった。会話に入りづらいうからという理由もあるが、屋敷に入ってからずっとお

かした感覚に陥っていたからだ。

どこか懐かしいような気配がするのだが、その気配がどこから感じられるのかわからない。屋敷の中は魔術実験を行っているせいかな至る所から魔力を感じる。平然と廊下に魔導具や魔石も転がっているので、気配だけを探るのはなかなか難しい。

ただ、帝国に懐かしいと感じる気配を持つ人はいないはずだ。再会したシャナリヤも今日は保護された集落の仲間にあいについているのでこの場にいるはずもない。

「リオネさま、わたくしは別行動をしてよろしいですか？」

「構わないけど、どうしたんだい急に？」

リオネが問うとクラリッサが苦々しい表情を浮かべた。

「わたくしは何度もメイドを派遣しました。ですが、屋敷はこの惨状です。とてもメイドが仕事をしたとは思えません。派遣したメイドに關してはわたくし自身が問い詰めるとして、おそらく同じような惨状になっ

ているキッチンくらいは綺麗にしなければお茶も入れられないでしょう」

「あー、確かにキッチンも同じなんだろうね。いいよ、クラリッサに任せるよ」

「ありがとうございます。メイドとしてこの現状に我慢することができません！ では、いつてまいりませう！」

「ルリもいく！ おねえちゃんのお手伝いする！」

意気込んでいざいかんとしたクラリッサにルリが手を上げて主張する。クラリッサに感化されたのかルリもやる気に満ちていた。

「おにいちゃん、いつてもいい？」

「えっと、クラリッサは平気？」

「大丈夫ですよ。ルリさまがお手伝いしてくださいれば百人力です」

「お姉ちゃんの言うことをちゃんと聞いて、危ないこととはしないって約束できるか？」

「うん！」

「なら頑張っておいで。クラリッサ、悪いけど頼むよ」

ルリの頭を撫でながらクラリツサに頼むと、彼女は微笑んでルリの手を握る。

「お任せください。ではいきましょう、ルリさま。メイドの必殺技を教えて差しあげます」

「ひっさつわざー？ おおー、なんかすごいね！」

おそろく必殺技の意味をよくわかっていないルリだが、お手伝いを許されたことを嬉しそうにしている。

二人は手をつなぐと麻人たちから離れ、キッチンへ向かっていった。

「さて、向こうはクラリツサに任せればいいとして、いい加減にヘルティーを見つけないとね。ほら、ティリウスも立ち上がって一緒に探してくれないかな」

「まったくいい迷惑だ。屋敷に引きこもっているだけでは飽き足らず、部屋の外にもでないつもりか、あの魔術馬鹿は！」

立ち上がったティリウスはズボンの埃を払うと、不機嫌な顔を隠すことなどせず悪態をつく。

ぶつくさ文句を言い続けるティリウスを放置して部屋をひとつひとつ覗いていく。屋敷の規模こそ大きく

ないが部屋数は多い。だが、やはりどの部屋も物置と化していた。

「改めて聞くけどリオネの妹ってどんな子なの？」

「ヘルティー・シュタインは魔術馬鹿の引きこもりだ」

「いや、そうじゃなくて、他にはないの？」

口を揃えて魔術馬鹿と言う幼なじみ三人だが、他のことはあまり言わない。クラリツサから聞いたことも少なく、リオネの使う魔術を開発したことで、洗濯に麻人が使用した『魔力式自動洗濯機』を作ったくらいしか知らない。

「そうだね、ヘルティーを一言で例えるなら研究者かな」

「強いて褒め言葉として表してやるなら適切だな」

「研究者？」

「戦いは苦手だけど、魔術の開発と解析に関しては天才としか表現する言葉が見つからないよ。歴代の魔王たちでさえ、開発と解析に関してはおもひも含め太刀打ちできないほどだからね」

「あとは各種族の生態にも詳しくあったな。あの引きこ

もりが屋敷をでるときは決まって魔術実験か、新しい種族を調べにいくときはばかりだ」

好奇心を抱いたことに關しては貪欲で、興味のないことには無関心。そんな印象を二人の言葉から麻人は感じ取った。

実際、屋敷の惨状を見ても、掃除をはじめとした家事の類もできるとかできないではなく、やろうとした形跡が見つからない。おそらくヘルティー自身がする必要がないと判断したのだろう。

少々極端な子だとは思うが、誰かに迷惑をかけていくわけではないので悪い印象はない。

「母が亡くなる前に好きなことを頑張りなさいとヘルティーに言ったんだ。だからだろうね、ヘルティーは母に言われた通りに好きなことを頑張り続けている。母の死後引きこもり、延々と研究を続けているのもきっと悲しみを乗り越えるあの子なりの手段なのかもしれないね」

「本当にたまにだが、ボクにも手紙がくることがある。まあ、大体が魔導書や魔導具の催促の場合がほとんど

だが、まったく連絡がないよりはマシだ」

「私にも手紙はくるけど、たまにはなく可能な限り顔をあわせたいとは思いうよ。食事に誘っても必ず断られてしまうからね」

「やはり引きこもりだな」

ティリウスが珍しく苦笑する。

亡き母と交わした言葉を守るために好きな研究を続けるヘルティーだが、アイグナシオに前原梨香子の手紙を読み聞かせる場に来たことはない。そこに矛盾を感じた。

「私だけではなく父にも顔を見せず、魔術ばかり研究している。もしかすると母の死から逃避するための手段として魔術に入れ込んでいるんじゃないかと不安になるよ」

姉としてヘルティーに対する心配は尽きないようだが、魔術研究に逃避することで母の死を認めないのであるなら、亡き母が残した手紙の内容も知りたくないはずだ。知ってしまった母の死を否応なく認めなければならぬのだから。

「だけど結婚相手が現れたくらいなんだから、リオネが心配するようなことはないんじゃないか？ 仮にそうだったとしてもその相手が支えてくれるはずだろ」

「正直、ヘルティーから結婚する報告があったときには目の前が色々な感情で真っ赤になったけど、支えてくれる誰かが側にいてくれるなら姉として安心できる」

「おい、ちよつと待て、血の匂いがするぞ」

そんなとき、ティリウスが足を止めて麻人とリオネを制した。

「血の匂いって、物騒だな」

「本当なのか、ティリウス？」

「間違いない……血の匂いがする。埃の匂いで邪魔さされているが確かだ」

鼻を動かし廊下の奥にあるまだ調べていない部屋を指さした。

「ほとんどが埃の匂いじゃないが、わずかに血の匂いがした。昨日今日流れた血じゃない、もつと前に流れた乾いた血の匂いがしたぞ。あの部屋だ」

「まさか、実験に失敗して怪我しているなんてことはないよな？」

麻人がまさかの事態を口にするのと、リオネが駆けだした。麻人とティリウスもあとに続く。

「ヘルティーっ！ 無事か!?!」

扉を蹴破って部屋の中へ飛び込んだ麻人たちは、視界に映った光景に衝撃を受けた。

「いいよおっ、気持ちいいい！ もつとお、もつと激しくうっ！」

「ヘルティーッ、ヘルティーッ！」

麻人たちの目の前で、黒髪を伸ばした少女が犬立ちになって、海色の髪の少年に激しく突かれていた。

腰と腰が打ちあう音と、二人が求めあう声のみが部屋の中に木霊している。

麻人だけではなく、リオネとティリウスも揃って口を開けて呆然としてしまう。

無理もない。ヘルティーが怪我をしているのではないかと思つて部屋へ飛び込んだら、見ず知らずの少年と営みの真っ最中だったのだから。

今まで覗いてきた部屋の中でももつとも広いこの部屋は、ベッドと複数のテーブルの上に魔導書などが所狭しと置かれていた。おそらくこの部屋を住居スペース兼研究部屋にしているのだろう。ベッドがある理由もそれなら納得できる。

「へ、ヘルティー？」

なんとか声を絞りだしたりオネだが、妹の名を呼ぶ声は震えている。動揺はよくわかる。麻人もティリウスも目の前でなにが起きているのか理解できないのだ。

しかし、姉の声には気づかずヘルティーは嬌声をあげ続ける。肢体をくねらせ、背後から突かれれば突かれるほど愛液を結合部から垂れ流して喘ぎ続けた。

「嘘、だろ……」

麻人はヘルティーと交わる青毛の少年から目が離せず、同時に動揺していた。

ヘルティーが性行為の真っ最中だったことも十分すぎるほど驚きに値するものだが、麻人にとつてそれ以上に驚きだったのが、ヘルティーの相手をしている少年なのだ。

「どうしてお前がここにいるんだ、トラスト・ランドイ！」

かつてともに戦った大切な仲間であり、兄貴と慕ってくれたトラスト・ランドイ本人だった。

先日再会した師匠のシャナリヤ・ウエルカーの話からアンナ・エルミートによつてエルシュノン王国で軟禁されているはずの弟分がなぜここにいるのかわからない。

なによりも、

「どうしてメイド服を着てるんだよっ」

本来、女性が着るべきメイド服を身に着けながら腰を振り続ける弟分に戸惑いの中、大声をあげた。

「え？ ちよつと、ヘルティー！ お客さんがきてるよ！ て、え、ええええええつ、なんでアニキがここにいるのッ？ えつと、ちよつと待って、これはその、事情があつて、説明したいんだけど、今は見ての通りそれどころじゃなくて……ヘルティーッ、待って、お願いだから腰を動かさないで——うぐッッ！」

麻人たちに気づいたトラストが驚きと羞恥から腰の



動きを止めようとするが、未だ来訪者に気づかないヘルティーは夢中で腰を振り続けている。

「射精したな」

「でちゃったようだね……」

「そのようだな——じゃなくて、誰かあの引きこもりから変態に進化した馬鹿女を止めろ！ いつまでこんなものを見せつけられなければいけないんだ！」

射精感に震えるトラストに三者三様の感想を抱くが、いち早く正気に戻ったティリウスが顔を真っ赤にして怒鳴った。

すると、トラストが射精したにもかかわらず快楽に身を任せて腰を振っていたヘルティーが、麻人たちに気づいて動きを止める。

「あれ、姉上？ どうしてここに？」

「やあ、久しぶりだね、ヘルティー。クラリッサに続いてキミまで私よりも大人になってしまったんだね。私の味方はもはやティリウスだけだよ」

リオネは力なくティリウスの肩に手を置くが、不愉快極まりないと言わんばかりに払われてしまう。

「行き遅れ魔王は黙っている。他に言うところがないのか！ ヘルティー・シュタイン。仮にも貴様は初代魔王とお祖母様の血を引いているにもかかわらず、昼間から情事にふけるとはなにぞとだ！ しかも、年端もいかない人間の子供を相手にするなど、恥を知れ！」

ティリウスはベッドに近づくと、未だ合体している二人を無理やりに引き離れた。トラストは足首に引つかかっていたショーツを引き上げ、はだけていたメイド服を整えていく。

「あ、ティリウスもいるんだ。久しぶり」

マイペースなかわからないが、トラストと違って羞恥に体を隠すこともせず堂々としているヘルティーは、姉と幼なじみに手を振る。

「ボクの話聞いていたのかっ？」

「ティリウスは相変わらずうるさい」

「なんだと！ だいたい貴様は、魔王の妹でありながら昼間から破廉恥なことをして見つともないと思わないのか！」

「思わない。わたしはトラストと愛を確かめあつてい

ただけ。ティリウスにとやかく言われる筋合いはないから」

そつぽを向くヘルティーに声を荒らげるティリウス。二人のやり取りが続くと思われたが、麻人に気づいたヘルティーがティリウスを制して、じつと見つめる。

「あなたは誰？」

「俺は叶海麻人だ。リオネのところまで世話になつてる人間だ。そして、君と一緒にいるトラスト・ランディの仲間なんだけど、どうしてここにトラストがいるのか教えてくれないかな？」

「あなたが、叶海麻人なの？　トラストが帝国にやってきた理由の叶海麻人。つまりわたしにとって運命の赤い糸なのね」

「はい？」

幼さが残る肢体を隠そうともせずベッドに立ち上がると、ヘルティーは目を輝かせた。

「いいわ、あなたには恩があるから教えてあげる」

一応、礼儀として目を逸らす麻人に気づかないまま、ヘルティーは語り始めた。

「トラストとの出会いは、わたしが開発した魔術を実験するために数カ月ぶりに外出したときだったの。狼の群れに襲われながら、傷ついた体でもう死んじやいそうなのに、瞳だけはキラキラして最後まで抵抗するんだって伝わってきた。気づいたら魔術の実験なんてどうでもよくなつてトラストを助けたの。初めてだった。いつも魔術実験だけがわたしにとつての最優先事項なのに、魔術がどうでもよくなつたのは百六十五年生きてきて初めてだった。意識を失う間際のトラストの笑顔に心を奪われて、ああこれが運命の出会いなんだなって思えたの。別に恋人がいらないことを気にしたこととはなかつたけど、彼に会うために今まで異性と出会わずに生きてきたんだって理解したの。わたしはトラストを屋敷に運んで手当をしたわ。幸い、わたしの知識と技術で助けることができたのは本当によかつた目覚めるまで一睡もしないでそばにいたのよ。だつて目覚めたときわたしがいないとかわいそうでしょう？　その甲斐があつて三日後にトラストは目を覚ましてくれたの。まともな食事もしていなくて、安心して眠つ

たこともしばらくなかつたみたいね。大変な思いをしてきたトラストのために生まれて初めて料理をしたのよ。たまにきてくれるメイドがやってくれると言ったけど、わたしはトラストの奥さんになると決めていたから、これからはこななくていいって言ったの。もともと最低限の事しかさせてなかつたけど、夫婦になつたのならわたしは自分で夫のために尽くしたいから――

「待て待て待てつ、長いつ、長すぎるつ！　いつまで続くんだ、この話は？　事情の説明ではなく、お前の気持ちを書いてあるだけじゃないか！　その人間の子供との出会いはなんとなくわかつたが、こちらが知りたいこととお前が話したいことが噛みあつていない！　というか、お前はただ自分たちの馴れ初めを自慢しただけだろうがっ！」

麻人もヘルティーにツッコミを入れたかつたのだが、あまりにも表情を恍惚まうごつとさせて話すものだから邪魔するのが悪いと思つてしまつていた。テイリウスが話を遮つてくれたことに心から感謝している。

「ねえ、リオネ」

「なにかな？」

「リオネの妹ってさ……個性的だね」

「正直に少し病んでいると言つてくれて構わないよ。私自身、ヘルティーがこんな子だつたか首を傾げているんだ。恋は女性を変えると聞いたことがあるけど、変わりすぎだよ……」

揃つて盛大にため息をついた。

「どうやら弟は厄介な相手と恋愛をしたようだ。」

「あの、アニキ……」

「麻人、私はヘルティーとテイリウスを止めるからキミが気にかけていた弟と話すといい。私も妹とは色々話さなければならぬことがあるからね」

「気を遣つてくれたリオネが妹たちの仲裁に向かうと、ずつと安否を気にしていた弟と向きあつた。」

「無事でよかつた。トラストがどうしていたかずつと気になつてたんだ」

「それはこつちの科白せりふだよッ！　アニキがアンナさまに裏切られて、俺とシヤナリヤさまは捕らえられて……」

：みんなはアニキが魔王と相打ちになって死んだって
言ってるし、もう誰を信じていいのかわからなくて！
でも、よかった！ 生きていてくれてよかった！」

胸の中に飛び込んでくるトラストを受け止めると、
お互いを確認しあうように強く抱きしめる。

「ごめんな、心配かけて」

再会した兄弟は涙を流しながら再会できたことを喜
びあう。

「でも、どうしてアニキは助かったの？」

「リオネに——お前には魔王って言ったほうがわかり
やすいかもな、彼女に助けてもらったんだ」

「魔王がアニキをッ？」

「驚くよな。だけど俺だって驚きだよ、お前がセック
スしていた相手、誰だかわかってるのか？」

「せ、セックスってのはつきり言わないですよ！ ってい
うか、相手はヘルティーーだけど、なんで？」

「あの子、魔王の妹だぞ」

「——え」

知らなかったんだろうな、と察した。

少し話をしたただけだが、ヘルティーーが自分から魔王
の妹だと言うとも思えなかったので予想はしていたが、
トラストがこうもあからさまに驚くと笑いが込み上が
ってくる。

「お、俺、知らなかった。ヘルティーーって魔王の妹だ
つたんだ」

「別に魔王の妹だからって関係が変わるものじゃない
だろ」

「それはそうだけど、驚くなってほうが無理だよ！」

「だよな」

哑然とするトラストに麻人は苦笑する。

もう少しだけトラストとヘルティーーの関係を聞きた
いが、それよりも気になることが山のようにあった。

「あの子、再会できたのは本当に嬉しいんだけど——
どうしてお前、メイド服着てるの？」

「……話せば長いんだ。たぶん、俺が帝国へくるまで
の道中を話すよりも。だから聞かないで、お願い」

「わ、わかった」

いきなり落ち込み始めたトラストにそれ以上尋ねる

ことはできなかった。

もしかしたら女装という特殊な性癖に目覚めたのかもしれないと不安になるが、大切な弟にカミングアウトされるとしてもまだ心の準備ができていないので麻人としてもちようどいい。

いつか話してくれるかもしれないが、それまでは兄としてそつとしておこうと誓った。

「じゃ、じゃあ女装は置いておくとして、どうやって帝国にきたのか、どうしてヘルティールと一緒にだったのかとか聞きたいことはたくさんあるけど、こうして再会できたからいつでも話はできるよな」

「まさか俺もこんなに早くアニキと会うことができるとは思わなかったから、なにをどう話していいのかわからないことがまとまってないんだ。それに、シャナリヤさまのこともあるし……」

「エルフの集落のことか？」

「知ってるの!？」

驚くトラストに頷く。

「師匠から聞いたんだ。シャナリヤは今、帝国にいる」

「本当ッ……よかったあ……」

安堵の息を吐きだしながら、トラストは床へ尻もちをついた。

まだ幼さを残す少年がどれだけ自分やシャナリヤのことを案じてくれていたのか痛いほど伝わってくる。だからこそ、こうして再会することができたことを感謝せずにはられない。

救ってくれたリオネ、身の回りの世話どころか魔力共有までしてくれたクラリッサ。彼女たちがいなければ自分はシャナリヤやトラストと再会することはできなかった。いや、死んでいただろう。

「それでシャナリヤさまはどこにいるの？」

「魔王の、リオネの屋敷にいる。俺も今世話になってるんだ。ここと同じ王都に住んでるんだぞ」

「知らなかったよ。俺は屋敷からでないほうがいいって言われてたから、それにまだ病み上がりだったし」

「下半身は元氣みたいだけどな」

「ちよつと! アニキ、やめてよ!」

からかうと顔を真っ赤にして恥ずかしがるトラスト。

旅をしているときは子供だったのに、少し合わない間に大人になってしまったのだと少しだけ寂しく思った。

「もうっ！ 話を戻すけど、シヤナリヤさまは元気の？ 集落のことがあるから俺、ずっと心配だったんだ」

「再会したときは体力を消耗していたけど命に別状とかはなかった。ただ……」

「ただ？」

シヤナリヤがアンナによって魔力を封じられてしまっていることを話すべきかどうか迷う。

トラストは純粹にアンナを姉として信頼し慕っていたことをよく理解していた。もちろん麻人も信頼していた部分に関しては同じだが、裏切られている。しかし、アンナはトラストを裏切ったわけではない。こうして生きているのがその証拠だ。

「トラストはさ、俺とリオネが戦っているとき、師匠がアンナになにかされたのを見てるよな？」

「うん。見たこともない魔術を使って、アンナさまがシヤナリヤさまの胸に手を……」

やはりトラストはシヤナリヤが語ってくれたように、すべてを見ていた。

「あのときのアンナさまはまるで別人だったよ。いつもと変わらない笑顔を浮かべていたけど、あんな酷いことをしながら笑える人なんていないはずだ」

「トラスト、よく聞いてくれ。師匠はアンナの魔術のせいで魔力を封じられて魔術が使えなくなったんだ」

「……そんな」

「気持ちにはわかる。あのアンナが、馬鹿みたいにお人好しで、自分のことを蔑ろないがしにしてまで他人を優先していたあの人が、俺を裏切って、師匠の魔力を封じて、エルフの集落を襲ったなんて未だに信じられないし、信じたくない」

「アニキ、でも」

「わかってる。俺は裏切られて殺されかけた。リオネたちが助けてくれなかったらここにはいない。師匠の魔力は奪われ、エルフの集落が壊滅したのは変えられない事実だ」

もしかしたらなにか理由があったのかもしれない。

だが、もう許せるとか許せないかという感情論ではすまないほどアンナは行動してしまった。

自分を殺そうとしたことだけならまだ許せた。生きているから、事情を聞くことができれば——おそらく納得はできないだろうけど、受け入れることができたかもしれない。

だけど、アンナのせいで多くの人が死んでいる。苦しんだ人も悲しんだ人もたくさんいる。もうアンナは引き返せない一線を超えてしまったのだ。

麻人は覚悟している。いずれアンナ・エルミートと戦わなければいけないことを。

できることならトラストをその戦いには巻き込まみたくないとも思っている。

トラストも当事者であることはわかっている。わかっていないながら、わがままだと承知で戦わないでほしいのだ。トラストには姉と慕ったアンナと戦ってほしくなかった。

「明日にでもお前の都合がよければ師匠に会ってみたらどうだ？ 今日ではかけているけど、明日は屋敷に

いると思うぞ」

「会いたい！ シヤナリやさまに伝えなきゃいけないこともあるんだ」

おそらくはエルフの集落についてだろう。トラストがどういう経緯でなを見たのかわからない。心の整理ができていない彼から無理やり話を聞くつもりは麻人にはなかった。

もちろん、詳細を訪ねたい気持ちはある。だが急いでしまつてはいけないとわかつていた。

「きっとお前の無事を喜んでくれるさ。心を整理して話すべきことをまとめておいてくれ」

「うん。アニキにも伝えたいことはあるから、今日のうちにちゃんとしておくよ」

お互いに準備することなく訪れた突然すぎる再会は嬉しかった。だが、問題はたくさんある。

アンナの真意、エルフの集落について、トラストがどうやって帝国までやってきたのか、知りたいことも多い。

ただ今だけは、また弟の笑顔を見ることができた

ことに感謝するのだった。

「……ねえ、アニキ。ところで、さ」

「なんだよ？」

「あの人たちを止めなくていいの？」

「気づかないふりをしてただけだなあ」

麻人とトラストの視線の先には、ヘルティーを中心にティリウスとリオネがいつの間にか口喧嘩に発展していた。

二人を止めに行ったはずのリオネまで参加している理由は不明だが、頬が引きつっているのを見ると、止めようとして反撃されたのだろう。

ティリウスは不機嫌な表情がさらに悪化していて、ヘルティーに関してはよくわからない。無表情ではないのだろうか。マイペースな印象もあってかわかりづらい。

「貴様が人間と恋愛をすることは百歩譲って認めてやろう。だが、まだ幼い少年と体を重ねるだけでは飽き足らず、女装させて昼間から変態行為にふけるのは女として恥ずかしくないのか！」

「私も個人の恋愛感情に小言を並べるつもりはないのだけどね、少々倒錯的ではないかい？」

「ティリウスと姉上には関係ない。わたしは大人だから放っておいて」

「貴様のどこが大人だ！ 興味があるかないかでしか判断しない子供ではないかっ！」

リオネはまだ冷静だが、ティリウスは駄目だ。激昂している。

人間が嫌いだと公言するティリウスにとつてやはりヘルティーとトラストの交際は許せないのかもしれない。もつとも、怒っている理由の多くはトラストの女装が理由の気がするが。

「トラストだってメイド服を喜んでくれてるよ。その証拠に朝からとつても元氣」

「そんなことボクたちが知るかつ！」

「どうか、朝からしていたのか……」

知りたくもない弟の情報が伝わってくる。

「トラストくん……」

「な、なんですか？」

「朝からお盛んですね」

「ごめんなさいッ！」

顔を真っ赤にするトラストだが、メイド服と幼さを残す少女のような容姿が相まって本当に少年なのか不安になる。一年間、一緒に旅をしていたときには少年らしい格好をしていたので気にしたことはなかったが、今のように女装していると初対面の人には少女にしか見えないかもしれない。

似合っているから構わない、と思えてしまうのはきつと脳がおかしくなっている証拠だ。

「ヘルティ、仮にもキミはトラスト・ランディよりも年上なんだからもつと大人の女性としての振る舞いをしたらどうか。髪だって、一応は整えているようだけど、寝癖があるよ。好きな少年を目の前に行っているんだから身だしなみもしっかりしないと」

「男がない姉上に言われたくないし」

「……ほう」

「それに、トラストはこんなわたしでもかわいい、好きだって言ってくれる。わたしはトラストに愛しても

らえればそれでいいの」

ヘルティのトラストに対する入れ込みようは相当のものだと感じた。二人の馴れ初めが気になる発言だ。よくよく考えれば、トラストと再会できたことがあまりにも嬉しくて忘れていたが、いつ帝国にたどり着いていたのかも麻人は知らない。

後日、心を整理したら話してくれると言っていたので、そのときにまとめて聞けばいいとわかっているが、ヘルティとの関係を見ると結構前から帝国にいたのではないかと思えた。

もつとも麻人とクラリッサのように、理由があつたとはいえ出会うてすぐに行為に至ってしまう場合もあるのだなんとも言えない。

「キミやトラストは構わないかもしれないが、周囲の目を気にしなさいと言っているんだよ。結婚するつもりがあるなら父上や親戚にも挨拶は必要だ。子供ができれば理想の母親でありたいと思わないのかい？」

「ヘルティ・シュタインが母親になると——はっ、笑わせるな」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
TEL.03-3555-3431(販売) / FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。

本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。

また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>